茨城県教育財団文化財調査報告第172集

北浦複合団地造成事業地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅴ

長野江向山遺跡

平成13年3月

茨　　城　　県
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第172集

北浦複合団地造成事業地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅴ

長野江向山遺跡（ながの えむかいやま）

平成13年3月

茨城県
財団法人　茨城県教育財団

遺構確認状況（南から）

第１号土塁第６トレンチ土層断面

序

茨城県は，鹿行地域の総合的発展を目指して，東関東自動車道の潮来～水戸間の延伸や，これを補完する国道や主要地方道等の幹線道路の整備を図っております。このため，この地域は，都市的開発の可能性が極めて高くなってきております。このような状況の中で，北浦複合団地造成事業が計画されたもので，その予定地内には長野江向山遺跡をはじめ多くの遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査事業について委託契約を結び，平成12年４月から６月まで長野江向山遺跡の発掘調査を実施いたしました。この調査によって貴重な遺構，遺物が検出され，郷土の歴史を解明する上で多大の成果をあげることができました。

本書は，長野江向山遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が，学術的な研究資料としてはもとより，教育・文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者である茨城県から多大なる御協力を賜りましたことに対し，厚く御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，北浦町教育委員会，北浦町開発課をはじめ，関係各機関及び関係各位からいただいた御指導，御協力に対し，衷心より感謝の意を表します。

平成13年３月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　齋　藤　佳　郎

例　　言

1　本書は，茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が，平成12年度に発掘調査を実施した，茨城県行方郡北浦町大字長野江113-13に所在する長野江向山（ながのえむかいやま）遺跡の発掘調査報告書である。

2　当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は，以下のとおりである。

　調　査　平成12年４月１日～６月30日

　整　理　平成13年１月１日～３月31日

3　当遺跡の発掘調査は，調査第一課長阿久津久の指揮のもと，調査第一課第３班長矢ノ倉正男，主任調査員宮﨑修士，成島一也が担当した。

4　当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は，整理課長川井正一の指揮のもと，主任調査員宮﨑修士が担当した。

5　本書の作成にあたり，縄張りについて東京都在住の藤本正行氏に御指導をいただいた。

6　発掘調査及び整理に際し御指導，御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し，X＝＋13,480m，Y＝＋61,280mの交点を基準点（Ａ１a1）とした。この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西・南北に各々10等分し，４m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C･･･，西から東へ１，２，３････とし，「Ａ１区」，「Ｂ２区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は，北から南へa，b，c･･･j，西から東へ1，2，3･･･0とし，名称は，大調査区の名称を冠して「Ａ１a1区」，「Ｂ２b2区」のように呼称した。

2　遺構，遺物，土層に使用した記号は，次のとおりである。

遺構　土塁－ＳＡ　堀－ＳＤ　土坑－ＳＫ　トレンチ－Ｔ

遺物　土器－Ｐ　石器－Ｑ　拓本記録土器－ＴＰ

土層　撹乱－Ｋ

3　遺構の実測図中の表示は次の通りである。

旧表土　白色粘土ブロックを含む層　砂層　黒色土層

焼土　炭化材　ローム層

4　土層観察と遺物における色調の判定には，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5　遺構・遺物実測図の作成方法については，次のとおりである。

(1)　遺構全体図は300分の１，遺構は60分の１，土塁と堀の土層断面図は100分の１，縄張り図は4,000分の１に縮尺して掲載した。なお，土塁と堀は遺構全体図として表した。

(2)　遺物は原則として３分の１の縮尺にして掲載した。

6　遺物観察表の記載方法は次の通りである。

(1)　土器の計測値の表示は，口径－Ａ　器高－Ｂ　底径－Ｃとし，単位はcmである。なお，現存値は（　）を，推定値は［　］を付して示した。

(2)　備考の欄は，残存率及びその他必要と思われる事項を記した。

抄　　録

ふ り が な	きたうらふくごうだんちぞうせいじぎょうちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書　　名	北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書
副 書 名	長野江向山遺跡
巻　　次	V
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第172集
著 者 名	宮崎　修士
編 集 機 関	財団法人　茨城県教育財団
所 在 地	〒310-0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　ＴＥＬ　029-225-6587
発 行 機 関	財団法人　茨城県教育財団
所 在 地	〒310-0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　ＴＥＬ　029-225-6587
発 行 日	2001（平成13）年３月21日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村番号	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
ながのえむかいやま 長野江向山遺跡	いばらきけんなめがたぐんきたうらまち 茨城県行方郡北浦町 おおあざながのえ 大字長野江113-13	424 ｜ 090	36度 07分 20秒	140度 30分 54秒	26 ～ 29m	20000401 ～ 20000630	1,357.5m²	北浦複合団地造成事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長野江向山遺跡	城　跡	中　世	土塁　1条 堀　1条	土師質土器（小皿）	中世の城跡。
	その他	縄文時代		縄文土器片，石器（敲石）	
		弥生時代		弥生土器片，石器（片刃石斧）	
		不　明	土坑　1基	剥片	

目　　次

序
例　言
凡　例
抄　録
目　次
第１章　調査経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査の成果 …… 7
　第１節　遺跡の概要 …… 7
　第２節　基本層序の検討 …… 7
　第３節　遺構と遺物 …… 8
　　１　中世の遺構 …… 8
　　(1)　土　塁 …… 8
　　(2)　堀 …… 18
　　２　その他の遺構 …… 21
　　(1)　土　坑 …… 21
　　３　遺構外出土遺物 …… 22
　第４節　まとめ …… 23

挿　図　目　次

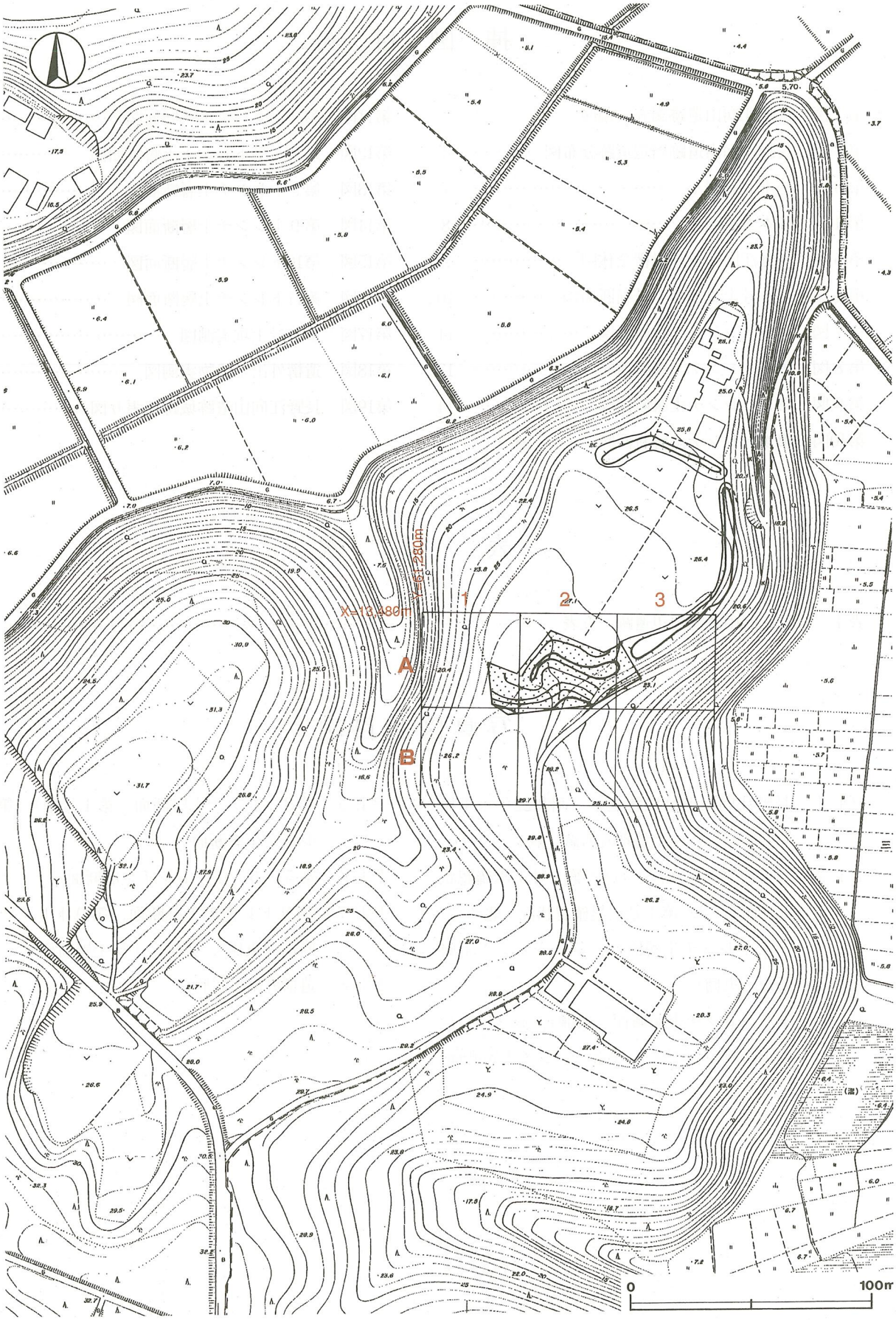
第１図　長野江向山遺跡調査区割図
第２図　長野江向山遺跡周辺遺跡分布図 …… 4
第３図　基本土層図１ …… 7
第４図　基本土層図２ …… 8
第５図　長野江向山遺跡遺構全体図 …… 9
第６図　第１号土墨・第１号堀断面図 …… 10
第７図　第１トレンチ土層断面図 …… 11
第８図　第２トレンチ土層断面図 …… 13
第９図　第３トレンチ土層断面図 …… 14
第10図　第４トレンチ土層断面図 …… 15
第11図　第５トレンチ土層断面図 …… 16
第12図　第６・７トレンチ土層断面図 …… 17
第13図　第８トレンチ土層断面図 …… 19
第14図　第９トレンチ土層断面図 …… 20
第15図　第10トレンチ土層断面図 …… 20
第16図　第11トレンチ土層断面図 …… 21
第17図　第１号土坑実測図 …… 21
第18図　遺構外出土遺物実測図 …… 22
第19図　長野江向山遺跡城跡縄張り図 …… 25

表　目　次

表１　長野江向山遺跡周辺遺跡一覧表 …… 5

写真図版目次

ＰＬ１　長野江向山遺跡城跡全景（昭和22年米軍撮影空中写真）国土地理院所蔵　約1／4,000
ＰＬ２　調査前現況（南西から），第１号土墨確認状況（西から），第１号土墨確認状況（北から）
ＰＬ３　第１トレンチ土層断面，第２トレンチ土層断面（東側）
ＰＬ４　第２トレンチ土層断面（東側），第２トレンチ土層断面（西側），第３トレンチ土層断面
ＰＬ５　第３トレンチ土層断面（第１号堀），第４トレンチ土層断面
ＰＬ６　第５・６・７トレンチ土層断面
ＰＬ７　第８トレンチ土層断面，第９トレンチ土層断面（東側），第１号土坑土層断面
ＰＬ８　遺構外出土遺物



第１図　長野江向山遺跡調査区割図

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経緯

平成6年3月28日，茨城県は茨城県教育委員会に対し，北浦複合団地造成事業予定地内の三和，内宿，成田及び長野江地区における埋蔵文化財の有無について照会した。茨城県教育委員会は，同年5月11・24日，6月23日に現地踏査，同年10月11～13日，平成7年1月24～26日に試掘調査を実施し，同年3月2日，事業予定地内に炭焼遺跡，三和貝塚，札場古墳群，木工台遺跡，手配台遺跡，内宿井戸作城跡，木工台古墳群及び長野江向山遺跡が所在することを茨城県に回答した。このうち，長野江向山地区と内宿井戸作地区は残存緑地とする旨茨城県から茨城県教育委員会に伝えられた。平成11年11月，総理府から，「情報収集衛星の地上施設建設に伴うパラボラアンテナ建設」の候補地について茨城県に問い合わせがあった。同年11月15日，茨城県は，茨城県教育委員会に，長野江向山地区のパラボラアンテナ設置計画地内の埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて照会した。これを受けて，同年11月25日，茨城県教育委員会は長野江向山地区の試掘調査を実施した。試掘の結果，長野江向山地区には長野江向山遺跡が所在することが判明し，同年12月17日，茨城県教育委員会はその旨茨城県に回答した。平成12年1月4日，茨城県は茨城県教育委員会に開発区域の一部変更について協議した。これを受けて，同年2月1日，茨城県教育委員会は，茨城県に，変更区域内に遺構が所在する旨回答した。同年2月28日，茨城県は茨城県教育委員会に，長野江向山遺跡の取り扱いについて協議した。これを受けて，茨城県教育委員会は同年3月8日，茨城県あてに，長野江向山遺跡について記録保存のための発掘調査を実施する旨回答し，調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県と茨城県教育財団は，埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び，平成12年4月1日から同年6月30日にかけて，長野江向山遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節　調　査　経　過

長野江向山遺跡の発掘調査は，平成12年4月1日から平成12年6月30日までの3か月間実施した。以下，調査の経過について，その概要を記述する。

4月前半

7日に現場事務所と倉庫を立ち上げた。10日に城跡の縄張り確認のために遺跡周辺の踏査をした。11日に調査補助員を投入し，12日に発掘調査器材搬入等の諸準備と調査区域の清掃及び伐開作業を開始した。

後半

18日から土塁の実測を開始した。24日に土塁の実測が終了し，遺構確認写真撮影をした。25日には調査区域外の南部と北部でテストピットの掘削を開始した。翌26日に掘削が終了し，テストピット内の土層調査を行った。さらに，土塁と堀，土橋に計11本のトレンチ掘削場所を設定し，土塁の第3トレンチから掘削を開始した。28日に第3トレンチの掘削が終了し，土層調査を開始した。並行して，土塁の第2・5トレンチの掘削を開始した。第5トレンチは，土塁に対して平行にトレンチを設定したため，人力で掘削を開始した。

5月前半

1日に第2トレンチの掘削が終了したので，土塁の第1トレンチの掘削を開始した。第1トレンチは，削

り取られた土塁の先端部分なので，土量が少なく，半日で作業が終了した。２日には土塁の第４トレンチの掘削を開始した。９日に第４・５トレンチの掘削が終了し，土層調査を開始した。11日には人力により堀の第８・10トレンチの掘削を開始した。

後半

23日に第８・10トレンチの掘削が終了し，土層調査を開始した。25日に土橋の第11トレンチの掘削を開始し，翌26日に掘削が終了した。土層観察の結果，土橋は城跡に伴う施設でないことが判明した。29日から，土塁の第６トレンチと堀の第９トレンチの掘削を開始した。

６月前半

前月に引き続き，土塁と堀のトレンチ掘削と土層調査を行った。５日に第９トレンチの掘削が終了し，土層調査を開始した。翌６日には第10トレンチの掘削が終了し，土層調査を開始した。

後半

15日に土塁の第７トレンチの掘削を開始した。19日に第７トレンチの掘削が終了し，土層調査を開始した。23日にはすべてのトレンチ掘削と土層調査が終了し，26日から補足調査を開始した。28日に調査区域内の安全対策を実施し，現場事務所を撤収した。

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

長野江向山遺跡は，茨城県行方郡北浦町大字長野江113-13に所在している。

北浦町は茨城県の南東部に位置し，北は鹿島郡鉾田町に，東は北浦をはさんで同郡大洋村に，南は行方郡麻生町に，西は同郡玉造町に隣接している。当町は，昭和30年に津澄村，要村及び武田村の３村が合併して北浦村となり，平成９年10月１日に北浦町となった。

行方郡は，西は霞ヶ浦に，東は北浦に面している。玉造町方面から潮来町方面にかけては，標高35～39mの行方台地が南北に延びている。

北浦町の南と西側は緩やかな丘陵を形成する行方台地が広がり，湖岸に面した東側は台地に支谷が樹枝状に入り組んでいる。台地先端部分は細長く突出した舌状台地となっている。北浦町の南東部を流れる武田川と山田川の両岸には沖積低地が広がっている。

地質は，砂鉄質の中粒砂よりなる石崎層，灰褐色のシルトからなる見和下層，黄褐色の中粒砂からなる見和上層，灰色中粒～粗粒の砂からなる竜ヶ崎砂礫層，灰白色粘土層の茨城粘土層，関東ローム層の順で堆積している。

長野江地区は北浦町の北東部に位置し，周辺は，北の鉾田町南部で巴川が，南で武田川が東流し，二つの河川と巴川の支流が台地を馬蹄形状に開析している。

長野江向山遺跡は，巴川と武田川のほぼ中間の，北浦に面した舌状台地上に位置している。舌状台地の標高は25～30mである。舌状台地の北側を長野江川が東に流れ，河岸から延びる支谷が台地の北西側と東側に入り込んでいる。長野江川両岸に広がる低地と，そこから延びる支谷は水田として利用され，水田と台地との比高は20～25mである。舌状台地の南側は，武田川河岸まで緩やかな丘陵が広がっている。調査前の現況は畑地と雑木林である。

第2節　歴史的環境

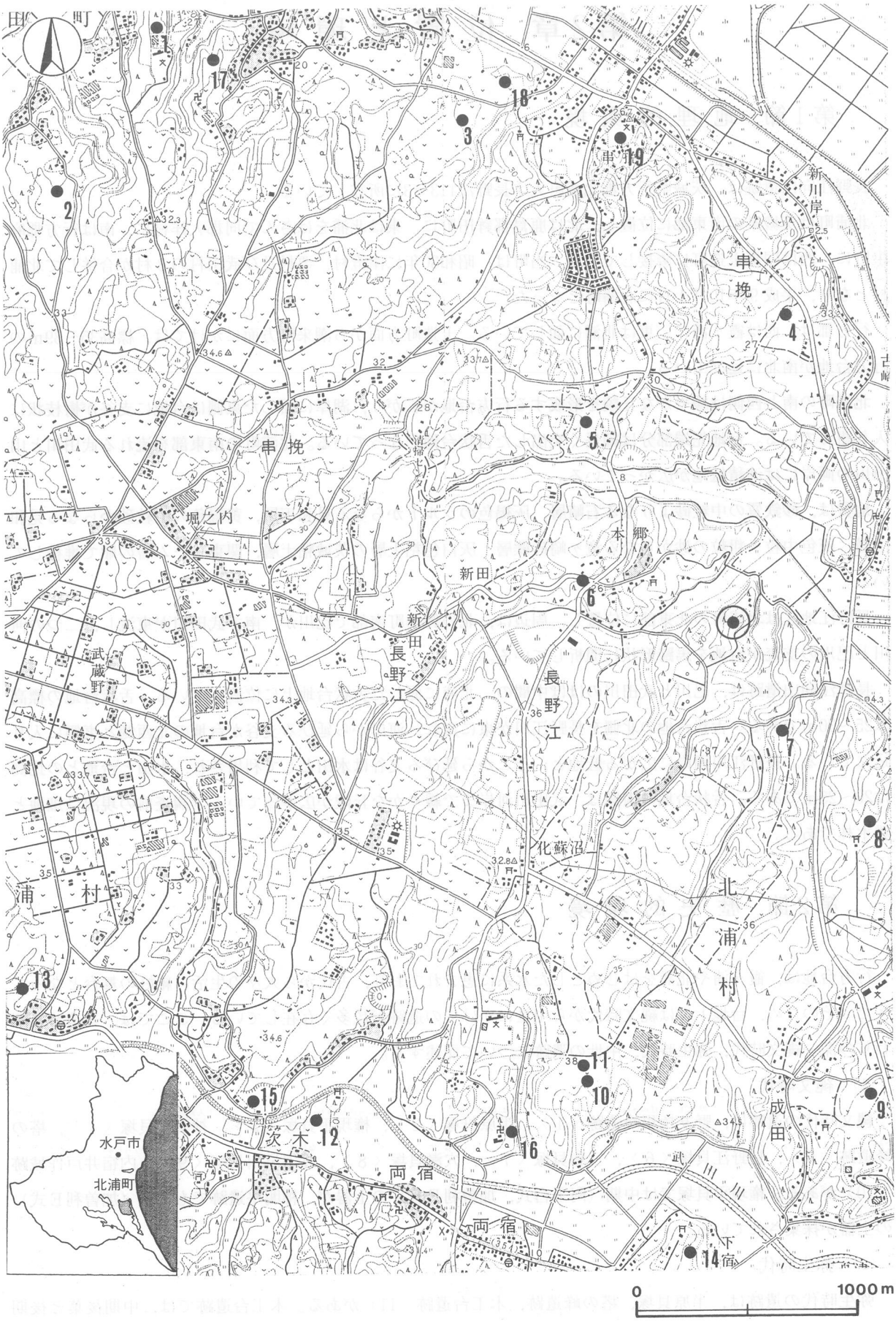
行方台地は，霞ヶ浦や北浦をはじめとした水系に恵まれており，古代から人々の生活に絶好の舞台となってきた。そのため，台地上には縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在している。ここでは，当遺跡と関わりの深い縄文時代，弥生時代，中世の遺跡について記述する。

(1)　縄文時代

縄文時代の遺跡は，野友権現峰遺跡〈１〉，半原貝塚〈２〉，権現平貝塚〈３〉，神明平貝塚〈４〉，塔の峰遺跡〈５〉，長野江貝塚〈６〉，三和貝塚〈７〉，穴瀬貝塚〈８〉，成田早川貝塚〈９〉，内宿井戸作城跡〈10〉がある。権現平貝塚では中期（阿玉台式，加曽利Ｅ式）の土器が，神明平遺跡でも中期（加曽利Ｅ式）の土器が採集されている。

(2)　弥生時代

弥生時代の遺跡は，半原貝塚，塔の峰遺跡，木工台遺跡〈11〉がある。木工台遺跡では，中期後葉と後期（二軒屋式期）の住居跡が確認されている。[1)]



第２図　長野江向山遺跡周辺遺跡分布図

表１　長野江向山遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺跡番号	市町村	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近	番号	遺跡名	遺跡番号	市町村	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近
◎	長野江向山遺跡	424-090			○	○			○	10	内宿井戸作城跡	424-093					○	○	○
1	野友権現峯遺跡	402-059			○					11	木工台遺跡	424-048			○	○	○	○	
2	半原貝塚	402-104			○	○				12	神明城跡	424-016							○
3	権現平貝塚	402-053			○					13	小貫館跡	424-082							○
4	神明平貝塚	402-055			○					14	木崎城跡	424-017							○
5	塔の峰遺跡	424-074			○	○	○			15	西館跡	424-020							○
6	長野江貝塚	424-071			○					16	内宿館跡	424-067							○
7	三和貝塚	424-069			○					17	野友城跡	402-045							○
8	穴瀬貝塚	424-045			○					18	郷士館跡	402-046							○
9	成田早川貝塚	424-047			○					19	串挽砦跡	402-047							○

(3)　中世

当遺跡の所在する長野江地区は，武田氏が所領する武田郷に属していたことから，近隣地域に武田氏の数多くの城館跡が残っている。ここでは，武田氏と周辺氏族との関連から城館跡等の遺跡を概説する。

行方郡は，常陸平氏一族の吉田大掾氏系の行方次郎宗幹が地頭権をもって支配していた。その四子は，為幹が小高に，高幹が島崎に，家幹が麻生に，そして，幹政が玉造に城を構え，それぞれの地名を姓として名乗った。武田氏がこの地域に入ったのは，14世紀末から15世紀初頭までの頃で，武田信久が武田川右岸の神明に居を構えた。以後，この周辺は武田郷となった。武田郷の南は山田氏の所領で，山田城跡をはじめ山田氏の城館跡が山田川左岸台地上に点在している。北に隣接する鹿島郡は，大掾氏系鹿島氏が支配していた。このように諸氏族が割拠する中で，神明には本城として神明城〈12〉が築かれ，さらに，1455年に西の武田川左岸に小貫館〈13〉が築かれた。1533年には，８代領主の通信が武田川右岸に木崎城〈14〉を築くなど，武田川沿いに武田氏の城館が築かれていった。ほかに，西館跡〈15〉や内宿館跡〈16〉，内宿井戸作城跡が所在している。武田氏は，通信の子信房の代に北で争っていた鹿島義清と領地を分け合い，巴川付近まで勢力を伸ばした。巴川右岸には，通信によって築かれた野友城跡〈17〉のほか，郷士館跡〈18〉や串挽砦跡〈19〉が所在している。このうち，昭和62年に神明城跡が，平成６年に木崎城跡が，平成９年に内宿井戸作城跡が調査されている。神明城跡では，二の郭と三の郭及び三の堀の一部の調査により堀と土塁が確認され[2]，木崎城跡では，堀，土塁，馬出部が確認されている[3]。内宿井戸作城跡は，神明城跡や木崎城跡のように文献等で確認できる城跡ではなかったが，調査により土塁と堀が確認された[4]。城館跡のほかに，当遺跡の南西1.5kmの化蘇沼には，1534年に武田俊房が再建した稲荷神社が，当遺跡の南西3.4kmの次木には，武田信久が建立した円通寺がある。

※文中の〈　〉内の番号は，第２図及び周辺遺跡一覧表中の該当遺跡番号と同じである。

註

1　茨城県教育財団　「北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　木工台遺跡２」『茨城県教育財団文化財調査報告』第152集　1999年

2　茨城県教育財団　「主要地方道土浦・大洋線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書　神明城跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第48集　1988年

3　茨城県教育財団　「国道354号国補道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　木崎城跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第109集　1996年

4　茨城県教育財団　「北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ　内宿井戸作城跡　木工台遺跡３」『茨城県教育財団文化財調査報告』第153集　1999年

参考文献

・大森昌衛・蜂須紀夫　『茨城の地質をめぐって』　1987年

・茨城県農地部農地計画課　『土地分類基本調査　玉造』　1984年

・茨城県農地部農地計画課　『土地分類基本調査　磯浜・鉾田』　1991年

・鉾田町教育委員会　「原始・古代史料編」『鉾田町史』　1995年

・鉾田町教育委員会　「紅葉城跡」　1992年

・下中邦彦編集　「茨城県の地名」『日本歴史地名大系』８　平凡社　1982年

・原　信吉　「武田氏（甲斐・常陸）」『郷土北浦』21号　北浦郷土文化研究会　1998年

・原　信吉　「武田氏の西街道」『郷土北浦』13号　北浦郷土文化研究会　1990年

・北浦村教育委員会　「中世（鎌倉・室町時代）」『北浦史資料考』　1985年

・吉成勇編集　「武田一族の故郷」『別冊歴史読本53　＜一族シリーズ＞「武田一族のすべて」』　新人物往来社　1998年

第3章　調査の成果

第1節　遺跡の概要

長野江向山遺跡は中世の城跡である。立地は，北浦町北東部の，標高25～30mの舌状台地の先端部分である。城の名称は不明である。遺跡の規模は周囲が約500mで，土塁が，東部から南端部まで約150m，北西部に約30m残っている。土塁内側の平場は戦後入植され，遺跡南端部から南西部の土塁は，斜面部に押し出され削平されている。さらに，北東部の家屋と平場中央の境に，北西から南東に土塁が約35mほど築かれている。また，南端部に残る堀は平場の出入り口として使われていた。現況は，土塁内側は畑地で，土塁と台地斜面部は雑木林である。調査区域は遺跡の南端部で，面積は1,357.5㎡である。

今回の調査によって，土塁1条，堀1条，土坑1基が確認された。

遺物は，遺物収納箱（60×40×20cm）に1箱出土している。土師質土器（小皿），縄文土器片，弥生土器片，石器（敲石・片刃石斧），剥片などが出土している。

第2節　基本層序の検討

調査区域外南部にテストピット1を，調査区域外北部にテストピット2を掘り，基本土層を観察した。

テストピット1（B1d0区）（第3図）

第1層は，黒褐色の表土で，層厚は6～20cmである。

第2層は，暗褐色のローム層で，層厚は8～35cmである。

第3層は，暗褐色をした層で，層厚は16cmほどである。

第4層は，黒褐色をした層で，層厚は12～22cmである。

第5層は，黒褐色をした層で，層厚は10～16cmである。

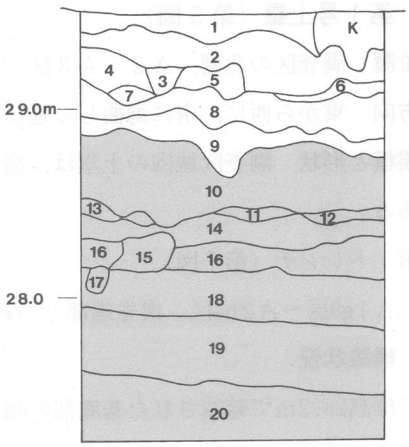
第6層は，暗褐色をした層で，砂を極少量含んでいる。層厚は4～10cmである。

第7層は，極暗褐色をした層で，層厚は10cmほどである。

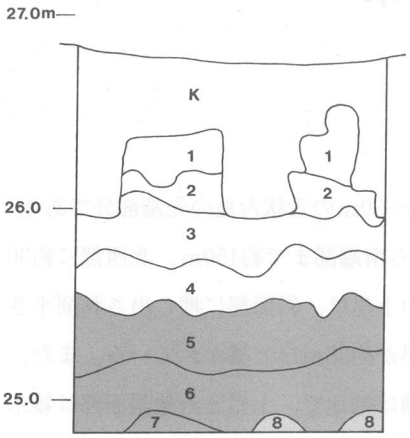
第8層は，明褐色をした層で，黒色粒子（植物遺体）を少量含んでいる。層厚は6～24cmである。

第9層は，明褐色をした層で，黒色粒子（植物遺体）を多く含んでいる。層厚は4～30cmである。

第10～20層は，砂層である。にぶい褐色の砂とにぶい橙色の砂が，20～50cm間隔で交互に層を作っている。



第3図　基本土層図1



第４図　基本土層図２

テストピット２（Ａ2a9区から北へ16m）（第４図）

第１層は，褐色のローム層で，層厚は16～28cmである。

第２層は，褐色のローム層で，層厚は４～20cmである。

第３層は，明褐色のローム層で，層厚は18～35cmである。

第４層は，明褐色をした層で，黒色粒子（植物遺体）を少量含んでいる。層厚は16～32cmである。

第５層は，灰褐色の粘土層で，層厚は20～38cmである。

第６層は，灰褐色の粘土層で，砂を含んでいる。層厚は22～38cmである。

第７層は，灰白色の粘土層で，層厚は16cmほどである。

第８層は，赤褐色の砂層で，灰白色の粘土粒子を含んでいる。層厚は14cmほどである。

第３節　遺構と遺物

１　中世の遺構

今回の調査では，土塁１条と堀１条を検出した。土塁は，遺跡東部から南端部まで約150m，斜面にそって残存しており，その南端部分を調査した。調査は，土塁に７か所のトレンチを設定して断ち割り，構築状況を観察した。堀は，検出された土塁の南側に東西方向に構築されている。調査は，堀に３か所のトレンチを設定して掘り込み，形状と埋土の堆積状況を観察した。以下，土塁と堀の調査結果について記述する。

(1)　土塁

第１号土塁（第５図）

位置　調査区の北側，Ａ２～Ａ３区。

方向　東から西に，南に湾曲して延び，Ａ2e4区で南に屈曲し，Ａ2h2区まで直線的に延びる。

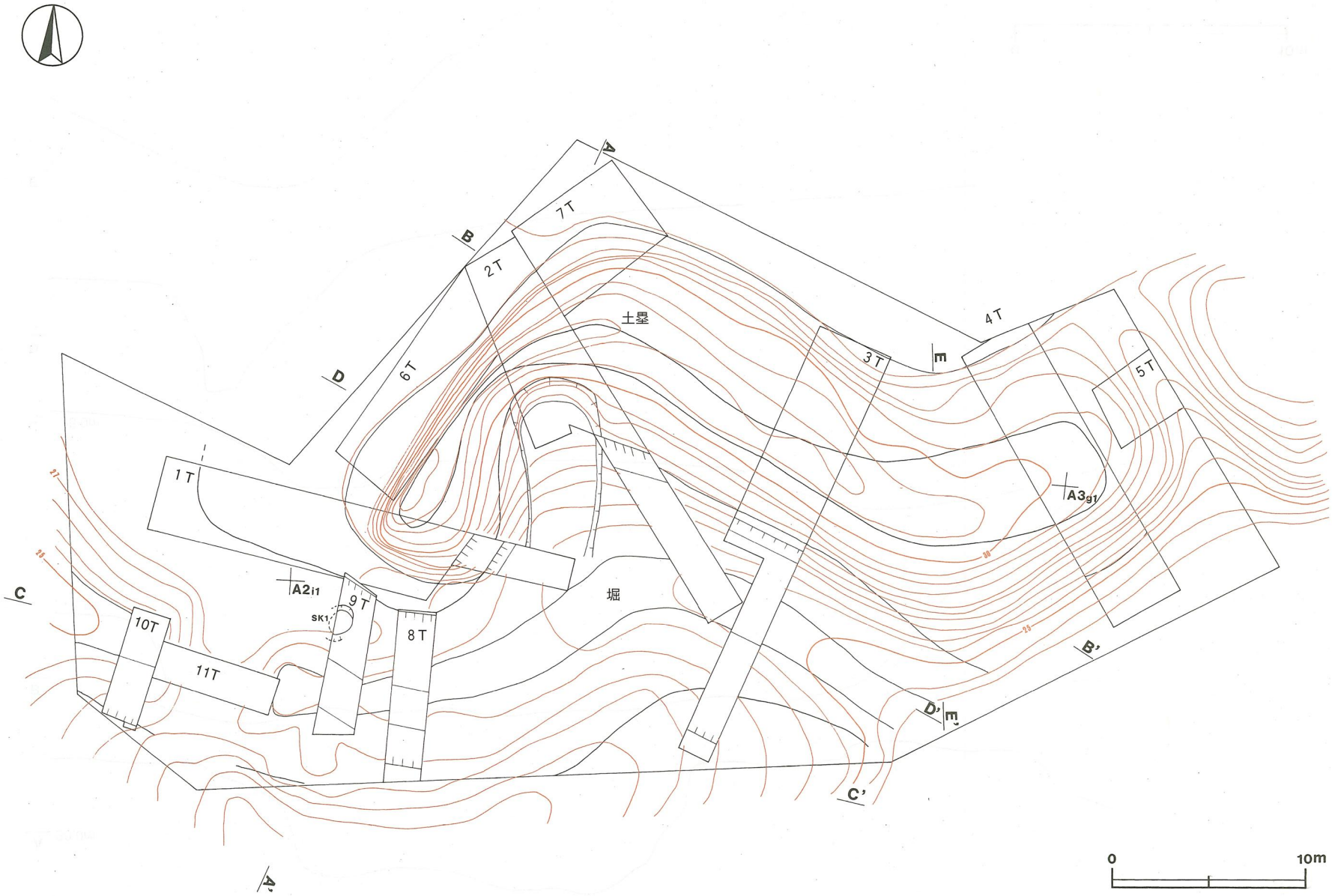
規模と形状　調査区域内の土塁は，高さは5.0～5.7mで，基底部の幅は4.2～9.4mである。平面形はＳ字状である。

第１トレンチ（第７図）

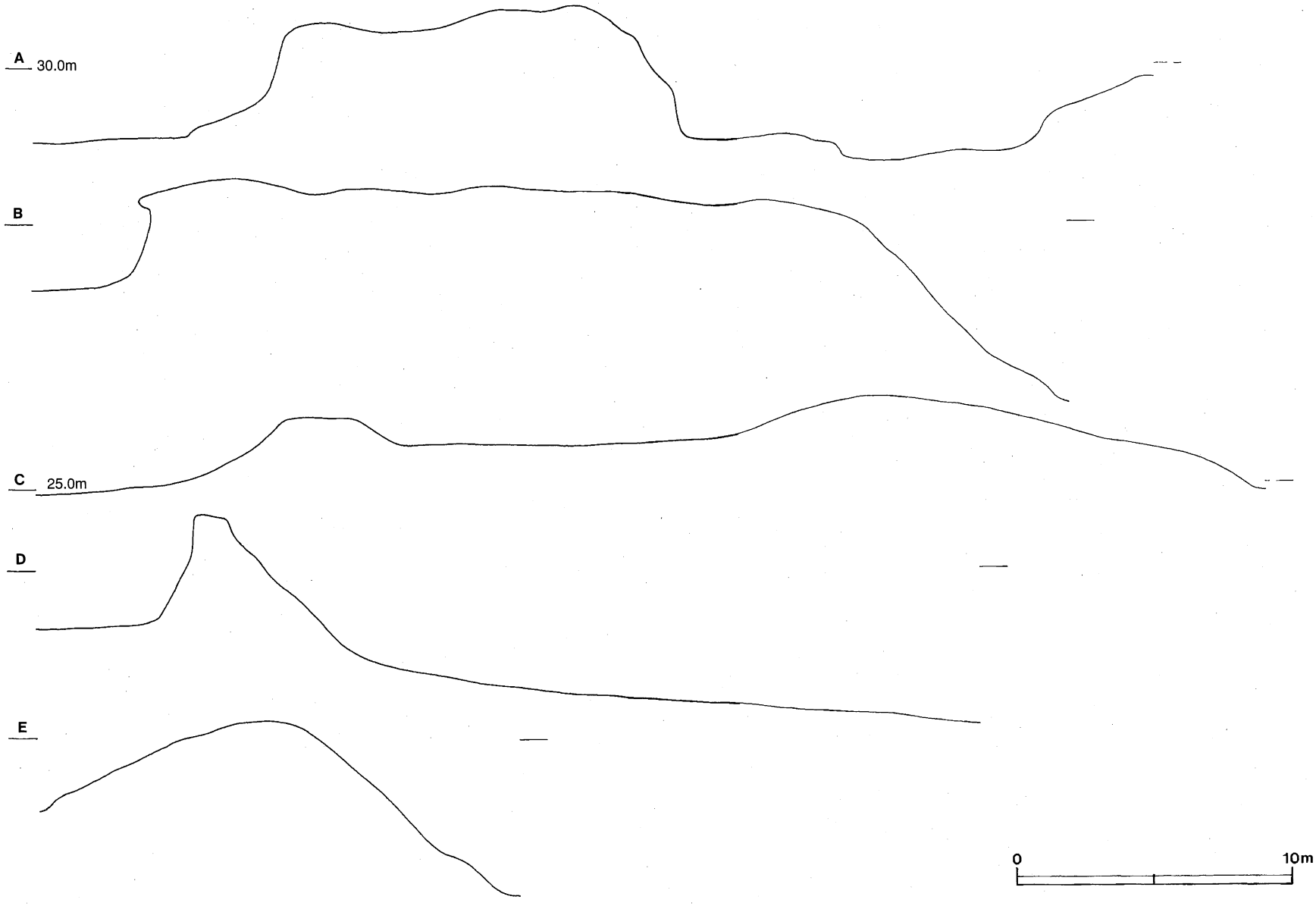
Ａ1g9区～Ａ2h4区。南先端部分の約２m削り取られた部分を，東西方向に幅約2.5m掘削した。

構築状況

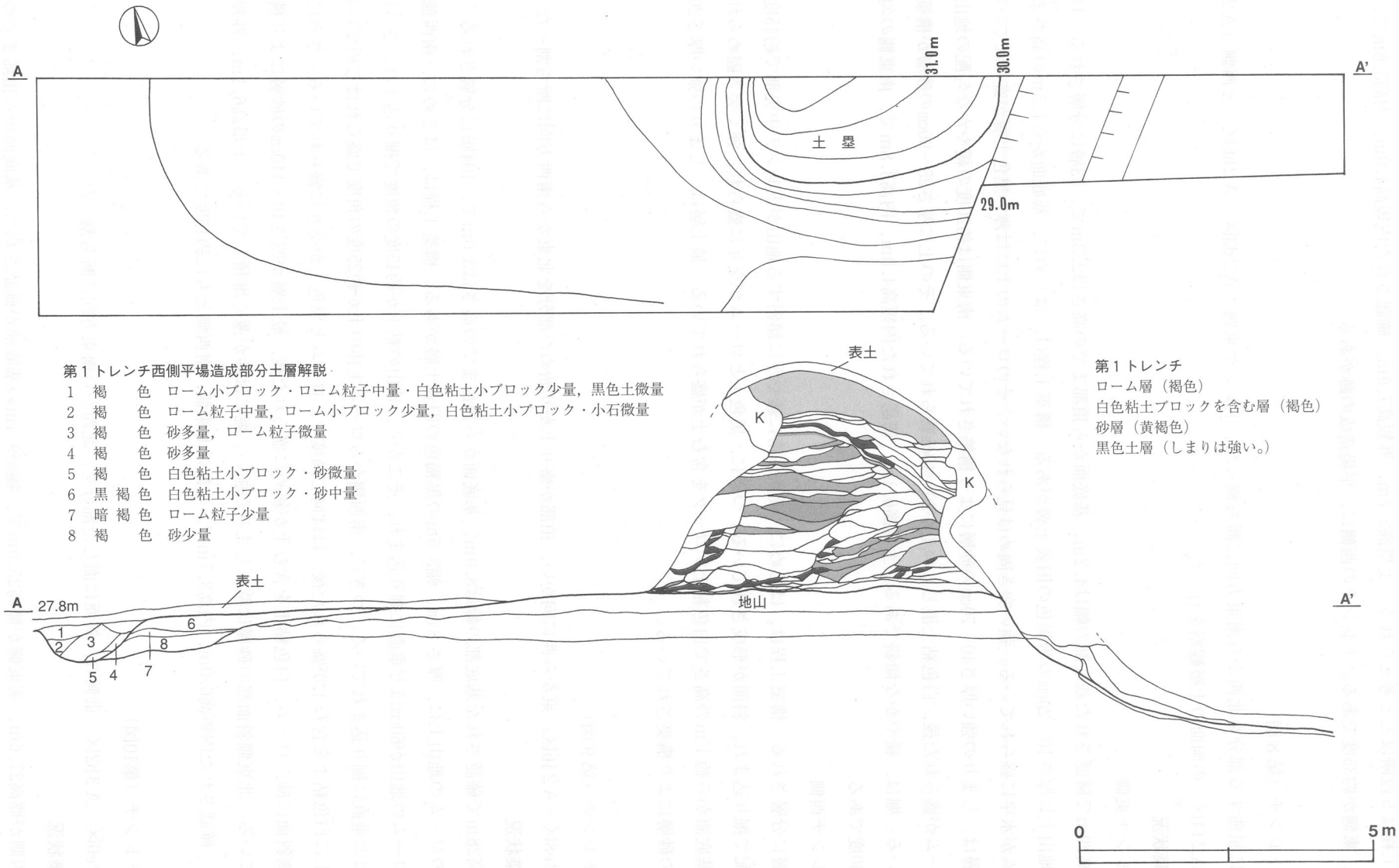
標高28.2mで確認された基底部の幅は(5.7)m，基底面から頂部までの高さは3.7mで，102層に分層される。構築工程は，はじめに，地山をローム層まで削平した後，東側の地山が約55度の角度で掘り込まれ，急斜面が形成されている。つぎに，基底面上に厚さ10cmほど褐色土が盛られている。その上に，東側から，ローム主体の土と白色粘土ブロックを含む土が交互に突き固められ，基底部の幅3.4m，基底面からの高さ約1.5mの土塁が築かれている。この土塁は，黒色土と白色粘土混じりの土が交互に重ねられ，西側に急斜面が形成されている。つぎに，西に2.5m拡幅され，同様に，西向きの急斜面が形成されている。土塁は，基底面から1.5mの高さまで強く突き固められている。その後，ローム主体の土と白色粘土ブロックを含む土が交互に盛られ，基底面から2.2～2.7mの高さで，黒色土が約４～14cm盛られている。最上層は厚さ40～70cmの砂層により構築されてい



第５図　長野江向山遺跡遺構全体図



第６図　第１号土塁・第１号堀断面図



第7図　第1トレンチ土層断面図

る。工程は５段階ほどと考えられる。土塁高5.7m，外短高7.9m，確認された内短高4.0m，内高3.6mで，勾配は，東側が約35度である。トレンチの西側に，平場造成の跡がある。

第２トレンチ（第８図）

南に屈曲する部分を北西から南東方向に断ち割った。トレンチ東側（Ａ2d3区～Ａ2h6区）と西側（Ａ2e3区～Ａ2f4区）の両面の土層観察を行った。

構築状況

トレンチ東側

標高29mで確認された基底部の幅は4.2m，基底面から頂部までの高さは2.3mで，53層に分層される。ロームの地山上に厚さ10～20cmの暗褐色の旧表土層がある。構築工程は，はじめに，基底面から1.5mの高さまでロームが水平に盛られている。強い突き固めは見られない。そのロームの上には薄い黒色土層が盛られている。最上層は，しまりの強い厚さ40～70cmの砂層により構築されている。南東側は約20度の緩やかな勾配の地山上にロームが盛られた後，白色粘土混じりの土が20～40cm盛られている。その上に厚さ25～90cmの砂層が構築されている。堀は，緩やかな傾斜である。土塁高6.1m，確認された内短高4.0m，内高3.8mで，南東側の勾配は約30度である。

トレンチ西側

82層に分層される。構築工程は，はじめに，北から南に緩やかに傾斜する地山がトレンチ中央部で約45度の南勾配で掘り込まれ，斜面が形成されている。つぎに，黒色土とロームが交互に盛られ，強く突き固められた後，基底面から約１mの高さで白色粘土ブロックを含む土が盛られている。最上層は，しまりの強い厚さ20～60cmの砂層により構築されている。

第３トレンチ（第９図）

Ａ2e8区～Ａ2j6区。東から西に向かい，頂部が盛り上がり始めた部分を北東から南西方向に断ち割った。

構築状況

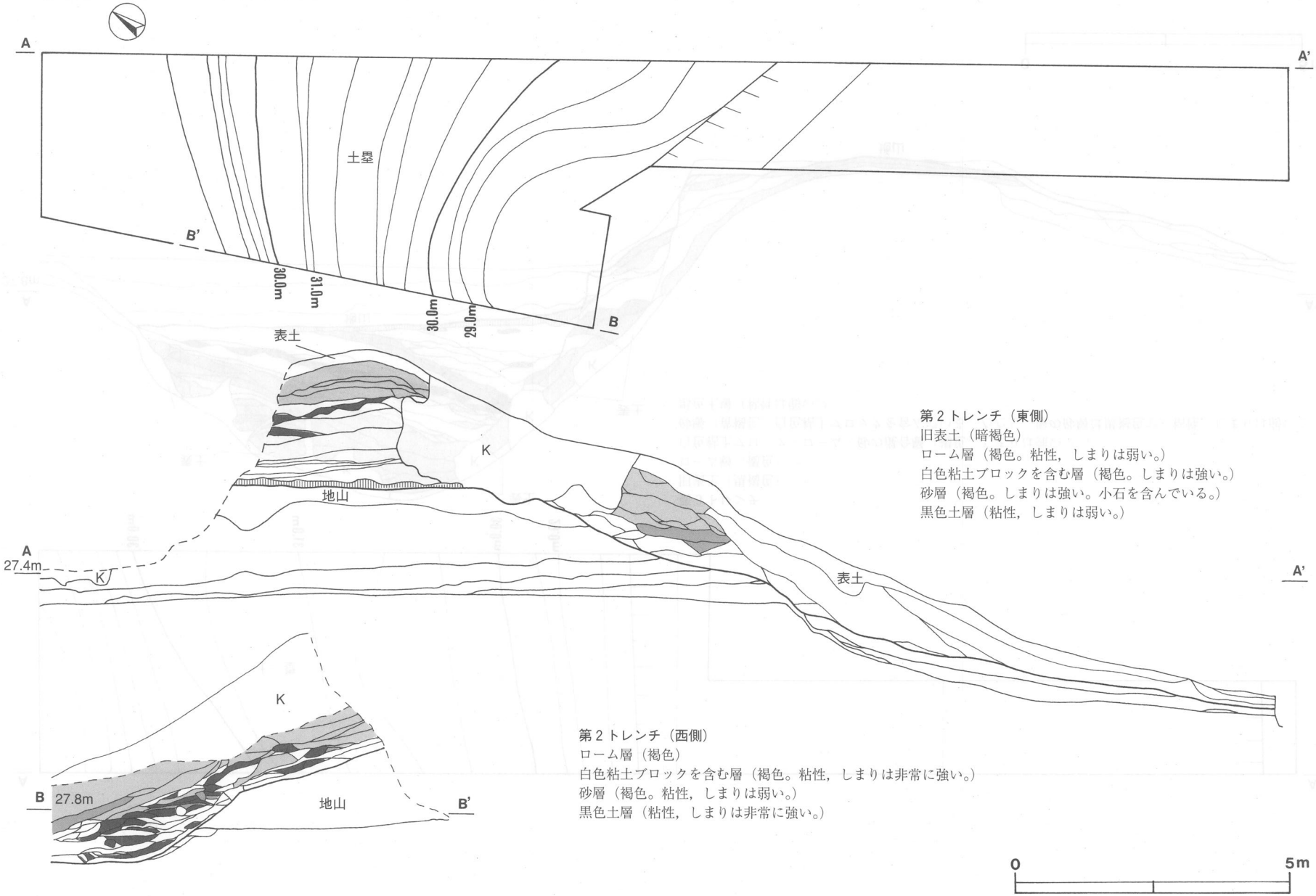
標高28mで確認された基底部の幅は8.0m，基底面から頂部までの高さは3.0mで，104層に分層される。南西側のロームの地山上に，厚さ８cm，幅5.5mの黒褐色の旧表土層がある。構築工程は，はじめに，南西側斜面のロームの地山が60cmほど垂直に掘り込まれ，そこから，地山の粘土が約45度の角度で掘り込まれ，さらに，90cmほど垂直に掘り込まれている。つぎに，南西側からローム主体の土が約25度の角度で盛られはじめている。その上に白色粘土を含む土が盛られた後，ほぼ同じ角度で，ロームと黒色土が交互に盛られている。さらに，南西側斜面に砂，ローム，白色粘土を含む土が斜めに盛られた後，最上層が厚さ40～140cmの砂層により構築されている。北東側斜面部の砂層は特にしまりが強い。堀には砂が薄く堆積している。土塁高6.1m，外短高9.0m，確認された内短高6.0m，内高3.7mで，勾配は北東側，南西側ともに約45度である。

第４トレンチ（第10図）

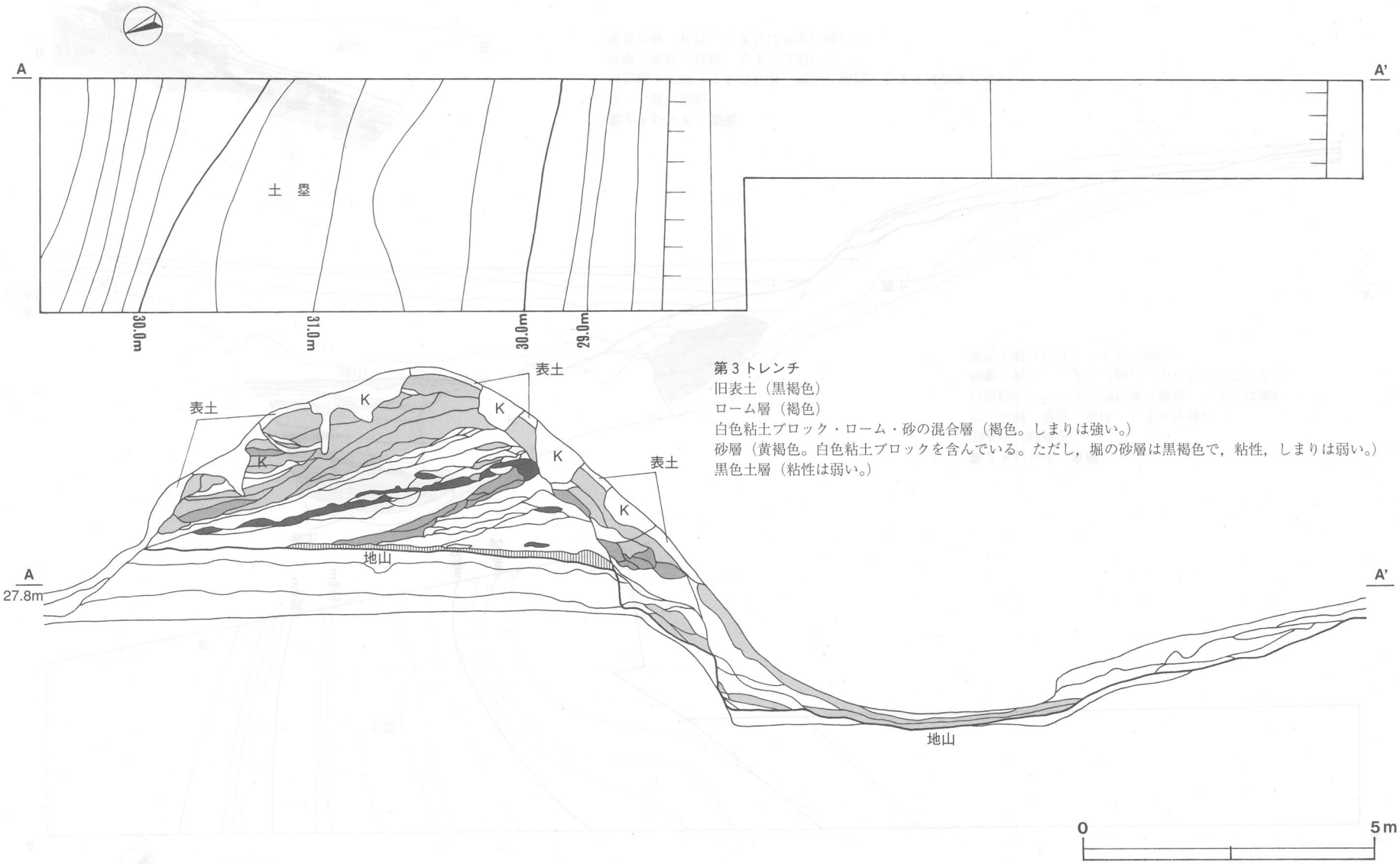
Ａ2e0区～Ａ3h2区。東側の，斜面に面した部分を，北西から南東方向に断ち割った。

構築状況

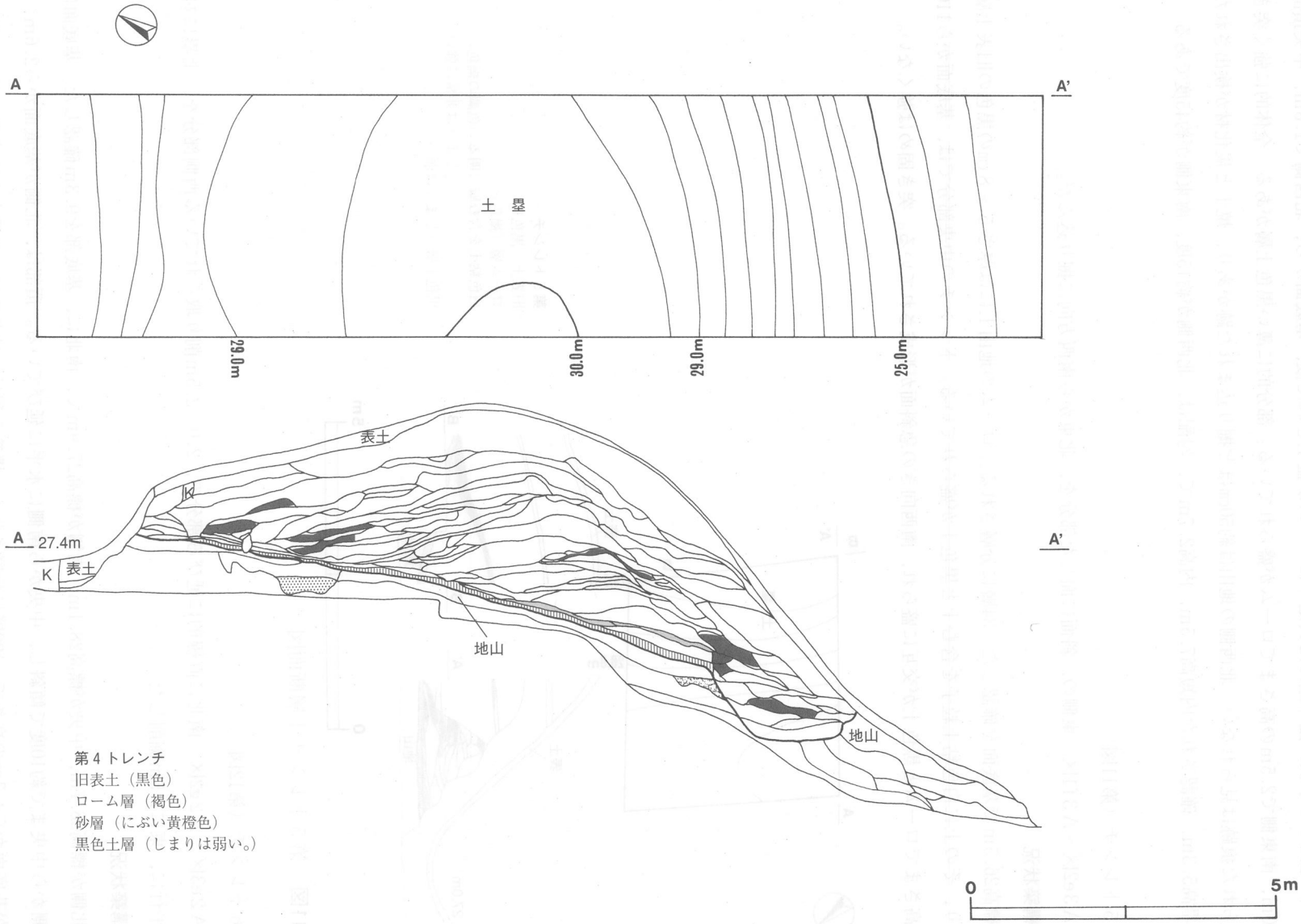
北西側が標高27.6m，南東側が標高25.0mで，幅が9.4mの基底部が確認された。基底面から頂部までの高さは3.1mで，106層に分層される。ロームの地山上に厚さ３～７cmの黒色の旧表土層がある。構築工程は，は



第８図　第２トレンチ土層断面図



第９図　第３トレンチ土層断面図



第10図　第４トレンチ土層断面図

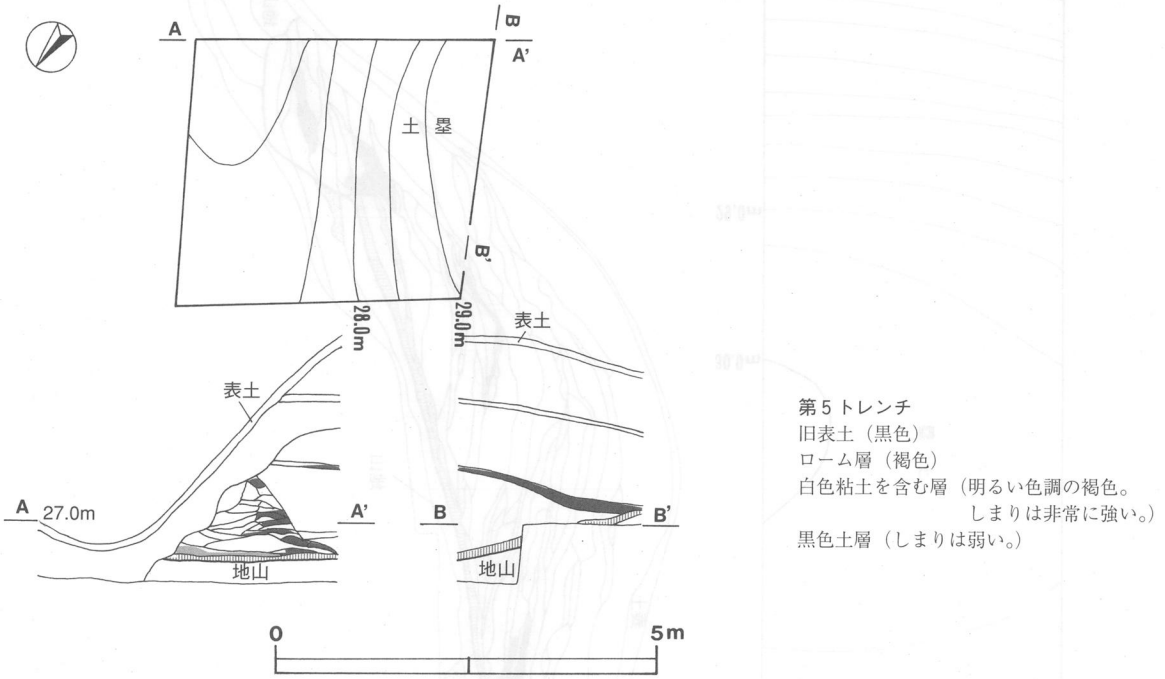
じめに，南東側からローム主体の土が，基底面から1.6mの高さまでほぼ水平に盛られている。つぎに，南東側の，地山をU字状に掘り込んだ犬走りにロームが盛土された後，基底面から，北西側で1.8m，中央頂部で3.0m，南東側で2.5mの高さまでロームが盛られている。部分的に薄い黒色土層がある。全体的に強く突き固められた痕跡は見られない。北西側の地山は約50cmほど掘り込まれた跡があり，焼土と炭化材が検出された。土塁高5.3m，確認された内短高7.5m，内高2.7mで，勾配は，北西側が約15度，南東側が約45度である。

第５トレンチ（第11図）

Ａ3e2区～Ａ3f1区。東側の，斜面に面した部分を，北東から南西方向に掘り込んだ。

構築状況

標高26.5mで基底面を確認した。34層に分層される。ロームの地山上には厚さ５～８cmの黒色の旧表土層があり，その上に白色粘土粒子を含む土と黒色土が盛られている。トレンチの中央部分では，基底面から110cmの高さまでロームと黒色土が交互に盛られ，南西向きの急斜面が形成されている。突き固めは強くない。



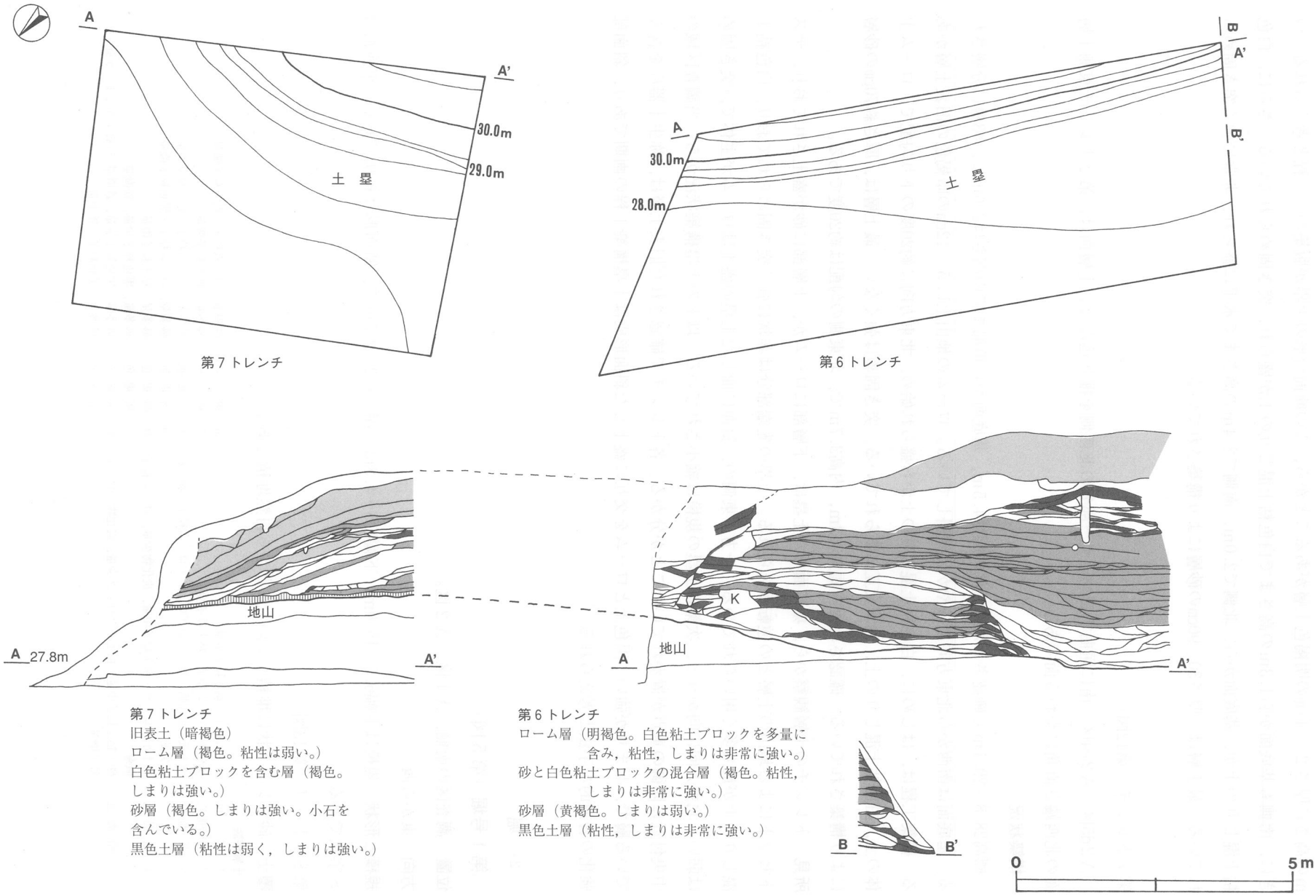
第11図　第５トレンチ土層断面図

第６トレンチ（第12図）

Ａ2e3区～Ａ2g2区。南北に直線的に延びる部分の，2.0～2.5m削り取られている西側部分を，土塁に対して平行に，東に1.5m掘削した。

構築状況

北側が標高28.7m，中央が標高28.1m，南側が標高27.9mで，南北に，基底部を9.3m確認した。基底面は，北側から中央まで約10度で傾斜し，中央から南側に水平に延びている。頂部は，北側が基底面から2.6m，南側が基底面から4.3mの高さで，190層に分層される。構築工程は，はじめに，北側から中央にかけて，ローム主体の土と白色粘土混じりの土がほぼ水平に盛られ，強く突き固められている。中央には黒色土とロームが５～15cmの厚さで，基底面から約1.5mの高さまで交互に盛られ，南向きの急斜面が形成されている。一方，北側は黒色土とロームが８～15cmの厚さで交互に盛られ，北向きの急斜面が形成されている。基底面から約1.5



第12図　第６・７トレンチ土層断面図

mの高さに厚さ２～４㎝の明褐色土層があることから，この断面台形の土塁が版築の一工程と考えられる。つぎに，南側も基底面から1.3mの高さまで白色粘土混じりの土が盛られ，突き固められている。さらに，白色粘土混じりの土が，基底面から，北側で2.0m，南側で2.4mの高さまで水平に盛られ，非常に強く突き固められている。最上層は，厚さ30～90㎝の砂層により構築されている。

第７トレンチ（第12図）

Ａ2d5区～Ａ2e4区。南に屈曲するコーナー部分の北西側を掘り込んだ。土層面は，第２トレンチ東側土層面の北西端と直角に交わる面である。

構築状況

標高28.8～29.1mで確認された基底部の幅は4.5m，基底面から頂部までの高さは2.6mで，43層に分層される。基底面は南西から北東方向に緩やかに傾斜している。ロームの地山上に５～12㎝の暗褐色の旧表土層がある。構築工程は，はじめに，白色粘土混じりの土から盛られ始め，北東方向に約20度の下り勾配で，ローム主体の土，白色粘土混じりの土，砂が交互に盛られている。突き固めは強くない。最上層は，厚さ約70㎝の砂層により構築されている。確認された内短高7.3m，内高3.7mで，北東側の勾配は約20度である。

所見　トレンチの土層観察から，堀に面した土塁は，下層部にロームが，上層部に砂が盛土されており，テストピットによる地山の土層との逆転が見られる。土塁の先端部分は非常に強く突き固められており，白色粘土混じりの土が最も多く用いられている。一方，東側の，斜面に面した土塁の盛土はロームが主体で，突き固めは弱い。北東方向に向かうと，次第に土塁の規模は縮小されている。以上の土塁構築状況から，当調査区域の中央付近に防御の重点が置かれていたことが分かる。各トレンチで確認された旧表土層は，弥生土器片を含んでいる層で，しまりが強い。黒色土とロームを交互に盛土した斜面形成は土塁構築工程の画期であり，斜面部強化の普遍的な手法と考えられる。

(2)　堀

第１号堀（第５図）

位置　調査区の南側，Ａ１区～Ａ２区。

方向　東から西。

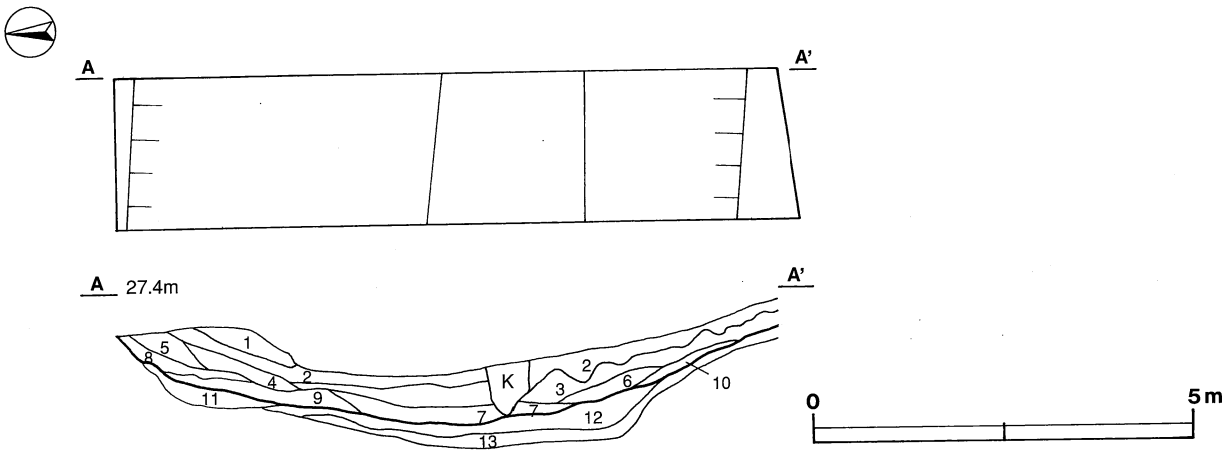
規模と形状　規模は上幅6.5～15.0m，下幅1.5～4.8m，深さ1.2～2.5mで，断面形は箱状である。平面形はＳ字状である。

第８トレンチ（第13図）

覆土　砂がレンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説

1	褐　色	ローム粒子・粘土粒子少量
2	極暗褐色	炭化物・ローム粒子・粘土粒子少量
3	暗褐色	砂中量，炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量
4	暗褐色	粘土小ブロック・粘土粒子中量，炭化物少量，ローム粒子微量
5	暗褐色	砂・粘土粒子中量，粘土小ブロック少量，炭化物・ローム粒子微量
6	褐　色	砂中量，ローム粒子・粘土粒子微量
7	褐　色	砂多量，粘土粒子微量
8	灰褐色	砂多量，ローム粒子・粘土粒子微量
9	灰褐色	砂多量，ローム粒子・黒色粒子微量
10	暗褐色	砂多量，粘土粒子微量
11	灰褐色	砂多量，黒色粒子少量，鉄微量
12	灰褐色	砂多量，黒色粒子少量，鉄微量(11層よりしまりが強い。)
13	褐灰色	砂多量，黒色粒子・鉄少量



第13図　第８トレンチ土層断面図

第９トレンチ（第14図）

覆土　砂がレンズ状に自然堆積した後，崩された土塁の土が堆積している。

土層解説（西側）

1	灰褐色	ローム粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量
2	暗褐色	粘土粒子中量，粘土中ブロック・粘土小ブロック・ローム粒子・砂少量
3	暗褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
4	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム大ブロック微量
5	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・粘土中ブロック・粘土小ブロック少量
6	褐色	ローム粒子少量，砂微量
7	黒褐色	焼土粒子･炭化粒子中量，ローム小ブロック･ローム粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・砂少量
8	暗褐色	炭化粒子・砂中量，焼土粒子・炭化物微量
9	灰褐色	砂中量，粘土粒子少量，粘土中ブロック・粘土小ブロック微量
10	褐色	砂中量，粘土小ブロック少量
11	暗褐色	粘土小ブロック・粘土粒子・砂中量，ローム粒子少量
12	暗褐色	砂・ローム粒子少量
13	暗褐色	粘土粒子・砂少量，粘土小ブロック微量
14	褐色	砂中量，ローム粒子･粘土小ブロック･粘土粒子少量，ローム小ブロック微量
15	褐色	砂･粘土中ブロック･粘土小ブロック･粘土粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
16	極暗褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂少量
17	灰褐色	粘土粒子中量，ローム粒子・砂少量
18	褐色	砂少量，粘土粒子微量
19	褐色	ローム粒子・粘土小ブロック・砂少量
20	暗褐色	ローム粒子少量，粘土粒子・砂微量
21	褐色	砂・粘土小ブロック中量，ローム粒子・粘土粒子少量
22	灰褐色	砂・礫多量
23	褐色	砂・鉄多量
24	褐色	砂多量，黒色粒子・鉄少量

第９トレンチ（第14図）

覆土　砂がレンズ状に自然堆積した後，崩された土塁の土が厚く堆積している。

土層解説（東側）

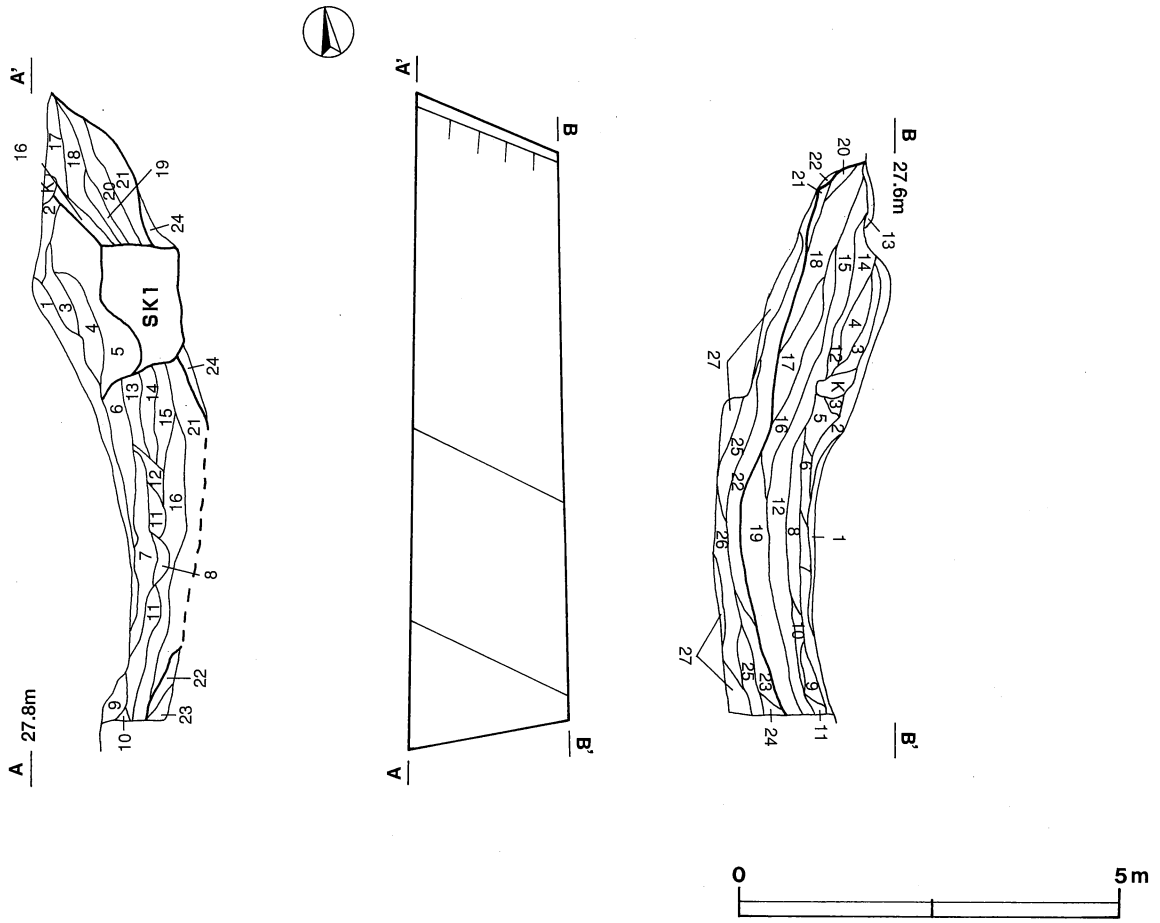
1	灰褐色	炭化物・炭化粒子少量，砂微量
2	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・砂微量
3	褐色	ローム粒子少量，炭化粒子・粘土粒子・砂微量
4	褐色	ローム大ブロック・ローム中ブロック・粘土粒子微量
5	褐色	ローム粒子・砂・粘土粒子少量
6	褐色	ローム粒子・砂・粘土粒子少量，粘土小ブロック微量
7	黒褐色	炭化粒子中量，炭化物・ローム粒子・砂少量，粘土粒子微量
8	褐色	粘土粒子中量，ローム粒子・砂・粘土小ブロック少量
9	褐色	砂少量，粘土中ブロック・粘土小ブロック・粘土粒子微量
10	褐色	砂少量
11	褐色	ローム粒子・砂・粘土粒子少量
12	極暗褐色	ローム粒子・砂少量
13	極暗褐色	砂・粘土粒子少量，ローム粒子微量
14	極暗褐色	ローム粒子・砂少量，粘土粒子微量
15	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量，ローム中ブロック微量
16	褐色	ローム粒子・砂微量
17	暗褐色	砂少量，ローム粒子・粘土粒子微量
18	褐色	ローム粒子・砂・粘土粒子少量
19	褐色	砂中量，ローム粒子・粘土小ブロック・粘土粒子少量
20	灰褐色	砂中量
21	褐色	砂中量，粘土粒子微量
22	褐色	砂多量，黒色粒子・鉄少量
23	灰褐色	砂・礫多量
24	褐色	砂・鉄中量，黒色粒子微量
25	褐色	砂・鉄多量
26	褐色	砂多量，鉄中量
27	褐灰色	砂多量，鉄少量

第10トレンチ（第15図）

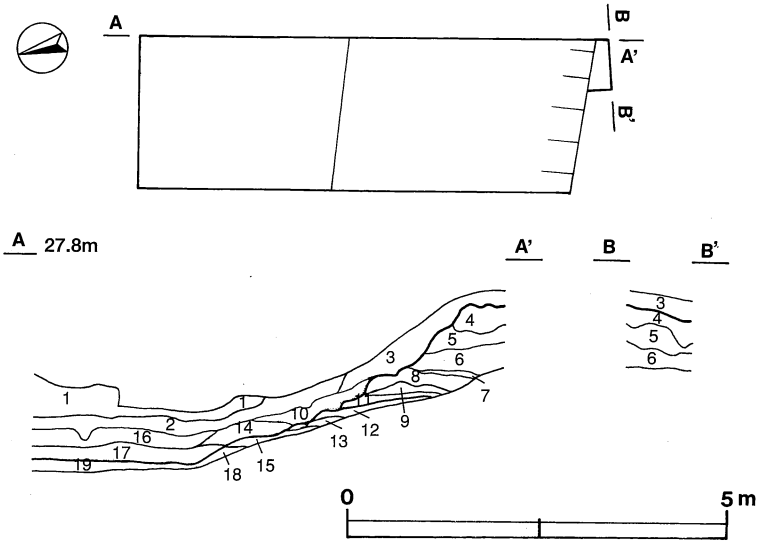
覆土　レンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説

1	暗褐色	表土
2	黒褐色	表土
3	暗褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック・砂微量
4	赤褐色	砂・礫少量，鉄微量
5	赤褐色	砂・礫・鉄少量
6	赤褐色	鉄多量，礫中量，砂・黒色粒子少量
7	褐色	砂多量，炭化粒子微量
8	褐色	砂多量・炭化粒子少量
9	褐色	砂中量，炭化粒子・鉄少量
10	灰褐色	砂多量
11	暗褐色	砂多量，炭化粒子微量
12	褐色	砂多量，炭化粒子微量
13	褐色	砂多量，炭化粒子微量（12層よりしまりが強い。）
14	暗褐色	砂多量
15	褐色	砂多量
16	暗褐色	砂中量
17	褐色	砂中量，礫微量
18	褐色	砂多量（19層よりしまりが強い。）
19	褐色	砂多量



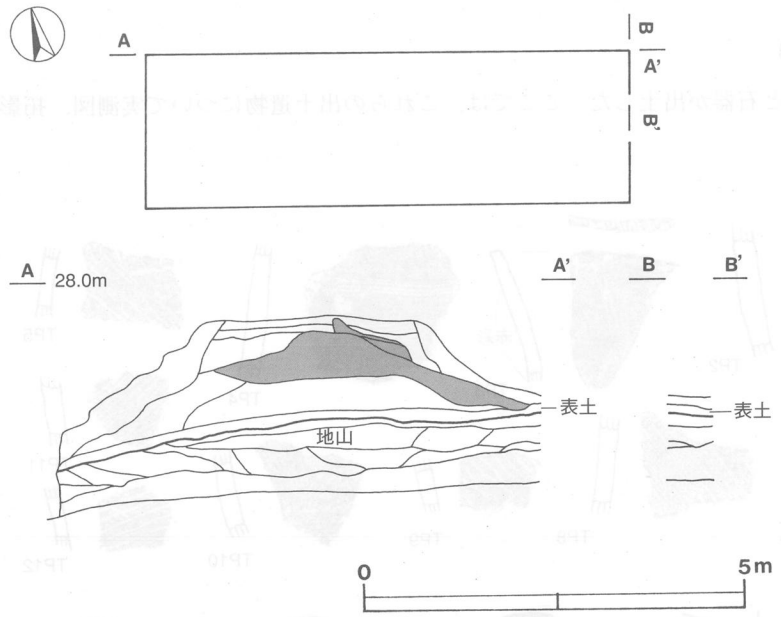
第14図　第９トレンチ土層断面図



第15図　第10トレンチ土層断面図

土橋（第16図）

調査区域の西部で検出された土橋は，底面付近の盛土からビニール袋が検出されたことから，戦後の入植後に構築されたものと判明した。



第11トレンチ（土橋）
表土（黒褐色。この層の上面からビニールが出土している。）
ローム主体の層（褐色。ロームブロック，白色粘土ブロックが含まれている。）
白色粘土を多く含む層（褐色）

第16図　第11トレンチ土層断面図

所見　本跡は第１号土塁に沿って構築された堀である。構築状況をみると，地山が砂層まで掘り込まれ，北側が急斜面に，南側が緩斜面に成形されている。掘削された土砂は北側の土塁構築のために掻き上げられていると考えられる。覆土は砂主体で，土塁上層から流れ落ちたものと推測される。廃城後の破却行為の痕跡は見られない。

2　その他の遺構

(1)　土坑

第１号土坑（第17図）

位置　調査区域の西部，A2i1区。

重複関係　第１号堀を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。

規模と平面形　確認された径は2.0mで，円形と推定される。深さは105cmである。

壁　北側は直立に，南側は外傾して立ち上がる。

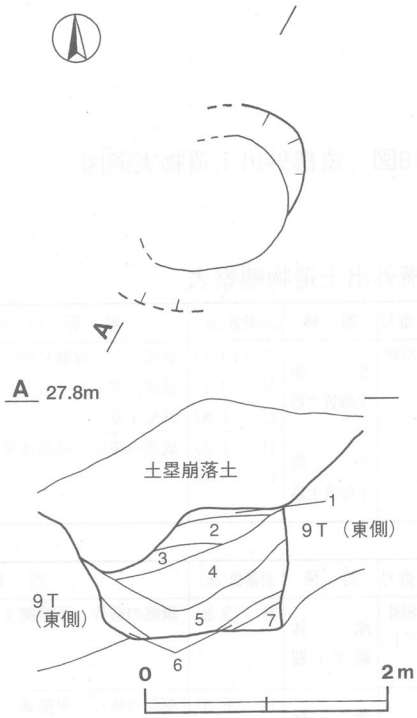
底面　皿状である。

覆土　７層からなる。粘土ブロックと炭化物が含まれていることから人為堆積と考えられる。

土層解説

1	褐　色	粘土粒子少量，ローム粒子微量
2	褐　色	ローム粒子・粘土粒子少量，ローム小ブロック微量
3	灰褐色	ローム粒子・粘土粒子少量，粘土小ブロック微量
4	褐　色	ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量，炭化物微量
5	極暗褐色	焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム粒子・砂少量
6	暗赤褐色	焼土粒子中量，炭化粒子少量，炭化物微量
7	暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂少量，焼土大ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量

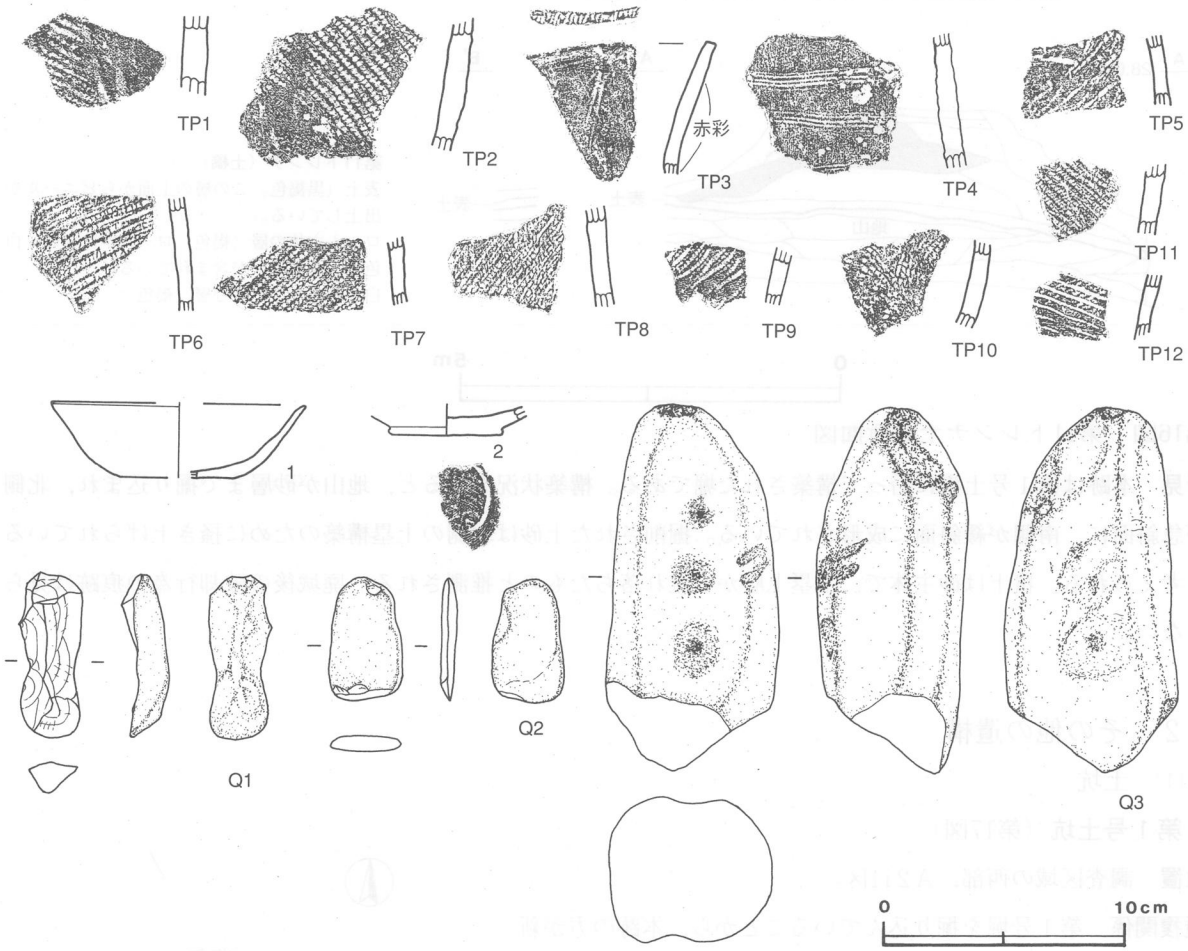
所見　底面から焼土粒子が，覆土中から炭化物が検出されている。戦後，調査区域の周辺で炭焼きが行われていることから，灰や焼土が廃棄された土坑の可能性がある。



第17図　第１号土坑実測図

3　遺構外出土遺物（第18図）

今回の調査で，遺構に伴わない土器と石器が出土した。ここでは，これらの出土遺物について実測図，拓影図，観察表を掲載する。



第18図　遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第18図 1	小　皿 土師質土器	A ［10.4］ B　3.1 C ［4.8］	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は外反する。	ロクロ成形。	長石・石英・赤色粒子 明黄褐色 普通	30%　PL8 第2トレンチ盛土中
2	小　皿 土師質土器	B　(1.2) C ［5.4］	底部の破片。底部は突出する。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	長石・石英 明黄褐色 普通	10%　PL8 表採

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第18図 TP1	深　鉢 縄文土器	B　(3.8)	胴部の破片。単節縄文LRと微隆起線文が施されている。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	5%　PL8 第5トレンチ盛土中 (加曽利EⅣ式期)
TP2	深　鉢 縄文土器	B　(6.5)	胴部の破片。単節縄文LRが施されている。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	5%　PL8 第5トレンチ盛土中 (中期)

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第18図 ＴＰ３	広口壺 弥生土器	Ｂ　(5.8)	片口の口縁部片。口唇部に縄文が押圧され，口縁部中位から下位の外面に赤彩が施されている。	砂粒・雲母 黒褐色（赤彩，明赤褐色）普通	５％　ＰＬ８ 第２トレンチ盛土中 (弥生時代後期)
ＴＰ４	壺 弥生土器	Ｂ　(5.9)	頸部の破片。櫛歯状工具（３本）により，横走する沈線が施されている。	砂粒・長石・石英 明黄橙色 普通	５％　ＰＬ８ 平場表採 (弥生時代中期後葉)
ＴＰ５	広口壺 弥生土器	Ｂ　(3.5)	胴部の破片。附加条の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英 黒褐色 普通	５％　ＰＬ８ 第５トレンチ盛土中 (弥生時代後期)
ＴＰ６	広口壺 弥生土器	Ｂ　(4.9)	胴部の破片。附加条一種（附加２条）の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・雲母・パミス にぶい褐色　普通	５％　ＰＬ８ 第５トレンチ盛土中 (弥生時代後期)
ＴＰ７	広口壺 弥生土器	Ｂ　(3.4)	胴部の破片。単節縄文が施されている。	砂粒・長石・石英 褐灰色 普通	５％　ＰＬ８ 第５トレンチ盛土中 (弥生時代後期)
ＴＰ８	広口壺 弥生土器	Ｂ　(5.0)	胴部の破片。附加条の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色　普通	５％　ＰＬ８ 第５トレンチ盛土中 (弥生時代後期)
ＴＰ９	広口壺 弥生土器	Ｂ　(3.2)	胴部の破片。附加条一種（附加２条）の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい褐色　普通	５％　ＰＬ８ 表採 (弥生時代後期)
ＴＰ10	広口壺 弥生土器	Ｂ　(4.1)	胴部の破片。附加条の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙色　普通	５％　ＰＬ８ 第４トレンチ盛土中 (弥生時代後期)
ＴＰ11	広口壺 弥生土器	Ｂ　(3.3)	胴部の破片。附加条一種（附加２条）の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英 褐灰色 普通	５％　ＰＬ８ 第５トレンチ盛土中 (弥生時代後期)
ＴＰ12	広口壺 弥生土器	Ｂ　(3.1)	胴部の破片。附加条二種（附加１条）の縄文が施されている。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい褐色　普通	５％　ＰＬ８ 表採 (弥生時代後期)

図版番号	種　別	計測値				石　質	特　徴	備　考
		長さ(cm)	幅　(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第18図Ｑ１	剥　片	6.7	2.7	2.1	19.8	頁　岩	縦長の剥片。	ＳＤ－１覆土中　ＰＬ８
Ｑ２	片刃石斧	5.0	2.9	0.6	(15.7)	粘板岩	自然石を利用。	第５トレンチ盛土中　ＰＬ８
Ｑ３	敲　石	(15.2)	7.2	5.9	(876.4)	砂　岩	火熱痕がある。	平場表採，凹石兼用　ＰＬ８

第４節　ま　と　め

長野江向山遺跡の城跡は，通称，城山と呼ばれ，土塁と堀が遺存していることは周知のことであるが，文献資料はなく，性格は明らかでない。ここでは，今回の調査成果から，城跡について判明したことを記述する。

(1)　縄張りについて

城の全体構造は，７つの廓から構成される（第19図）。舌状台地の先端部に立地している当調査区域は主郭である。舌状台地の先端部分は，突端が北東側に細長く延びており，そこに笹廓が築かれていたと考えられる。虎口は北東斜面から台地に上った所に構築されていたと考えられる。また，調査区域中央部の土塁は最も強固に構築されていることから，ここも，虎口が存在した可能性が高い。ほかに，舌状台地の東側にⅢ，Ⅵ郭が，西側にⅣ，Ⅴ郭がそれぞれ築かれ，さらに，舌状台地の基部にⅦ廓が築かれている。このⅦ廓の南西側に台地からの敵の侵入を防ぐ横堀が構築されている。

(2) 土塁の断面実測調査について

土塁の断面実測調査により，調査区域中央部の堀に面した土塁と調査区域東側の台地斜面に面した土塁は，規模と構築方法が異なることが分かった。はじめに，土塁の構築の特徴について記述する。

調査区域中央部の土塁の先端部付近は，構築工程が小刻みである。各工程における斜面部強化のための黒色土層は，大変硬くしまっている。この黒色土は，基本土層にはみられない土で，粒子は細かく，ローム粒子等の含有物をほとんど含んでいない。第６トレンチでは，高さが1.5mほどの断面台形の低い土塁の構築工程の後で，土塁の最上部に厚さ約４cmほど明褐色土が盛られている。この土は，地山のハードローム層直下の植物遺体を含む粘土層が漸位的に変化したもので，粘性としまりが大変強い。そのほか，黒色土，白色粘土混じりの土，ロームが交互に盛土されることや白色粘土がロームや砂と混合されていることは，土の特性を生かした土塁の保水と強度保持の方法と考えられる。

一方，調査区域東側の土塁の盛土は，ローム主体であり，部分的にローム層に挟まれて黒色土層が見られる。この黒色土はローム粒子などの含有物を含んでいることから，土塁の先端部付近の構築で斜面形成に使われた黒色土とは異なる性質の土である。このように，黒色土をローム等の盛土に挟むように土層を構成する手法は，近隣の城跡の土塁構築にも見られる。盛土は，平場造成による排土と考えられる。

つぎに，調査区域中央部と東側の土塁の規模を比較する。

長野江向山遺跡土塁規模比較表

	高さ m	構築高さ m	外短高 m	内短高 m	内高 m	敷幅 m	盛土層	外壁面勾配 度	内側勾配 度
中央部土塁３Ｔ	6.1	3.0	9.0	6.0	3.7	8.0	104	45	45
東側土塁４Ｔ	5.3	3.1	—	7.5	2.7	9.4	106	45	15

調査区域中央部の土塁は東側の土塁と比較して内側勾配が急で，土塁高と内高は約１mほど高い。これは，遺跡の南端部から南に向かい標高が高くなることから，平場内への視界を遮断する必要があるためとこの部分に防御の重点を置いているためと考えられる。

以上のことから，土塁構築における土の選択と層の組み合わせや，地形に合わせた構築の規模など，築城者の設計意図が分かった。

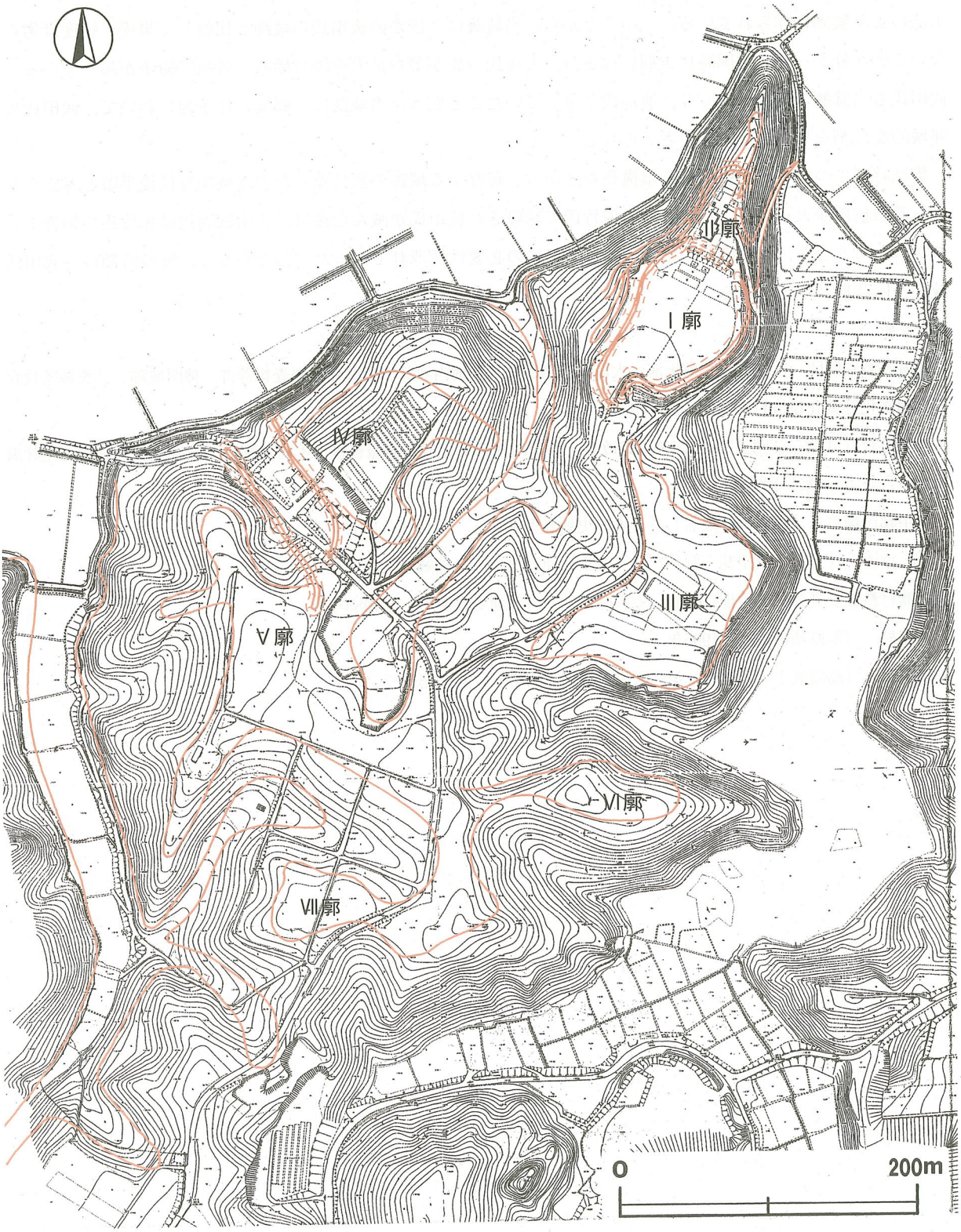
(3) 出土遺物について

ここでは，土師質土器と弥生土器及び石器について概説する。

土師質土器は，小皿が２点出土している。時期は15世紀以降である。Ｐ１の小皿は，第２トレンチの盛土中から出土している。

弥生土器は，調査区域東側の第５トレンチからの出土が多い。時期は，足洗式期（中期後葉）の土器片が１点出土しているほかは後期後葉のものである。赤彩された片口の広口壺の口縁部片は南関東系の土器と考えられる。

石器は，敲石と片刃石斧が出土している。敲石は凹石としても兼用されている。なお，火熱痕があることから，炉石として再利用されていた可能性がある。片刃石斧は，自然石を利用して作られた弥生時代の石器と考えられる。第５トレンチ盛土中から出土している。第５トレンチ付近の土塁盛土は，平場造成時の排土と考えられることから，調査区域東側の斜面付近に弥生時代の住居跡が存在した可能性がある。



第19図　長野江向山遺跡城跡縄張り図

(4) まとめ

廓構成では，当調査区域の廓を主郭とし，廓が台地上に７か所築かれている。また，確認された土塁は版築工法により強固に作られている。このことから，当城跡は，ほかの武田氏の城跡と比較して規模と強度は劣らないことが分かった。戦国時代末期になると，大掾氏一族が勢力拡大を図り始め，各地で紛争が起きている。武田氏も当麻郷の領地をめぐり，鹿島氏と争っていたことから，当城跡は，郷境の係争地において，武田氏の陣城的な役割を果たしていたと考えられる。

築城時期については，強固な土塁構築などから，現存する城跡の形になったのは戦国時代後半頃と考えられる。武田信房が天正19年（1591年）に佐竹氏に誘殺され武田氏が滅んだ後は，武田郷周辺は佐竹氏の影響下におかれたことから，郷境の争いはなくなり，当城の必要性は薄れていった。したがって，廃城時期は，武田氏滅亡と同時期と推定される。

参考文献

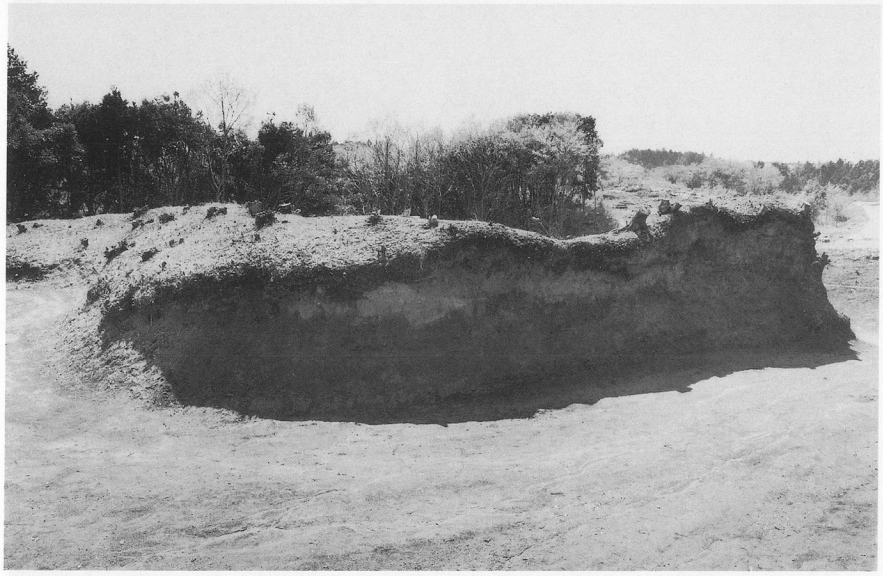
・茨城県教育財団　「主要地方道土浦・大洋線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書　神明城跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第48集　1988年
・茨城県教育財団　「国道354号国補道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　木崎城跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第109集　1996年
・下中邦彦編集　「茨城県の地名」『日本歴史地名大系』８　平凡社　1982年
・原　信吉　「武田氏（甲斐・常陸）」『郷土北浦』21号　北浦郷土文化研究会　1998年
・北浦村教育委員会　「中世（鎌倉・室町時代）」『北浦史資料考』　1985年
・美浦村　『木原城跡Ⅱ』　1995年
・牛堀町　『島崎城Ⅰ　第一次・第二次発掘調査報告書』　1987年

写　真　図　版

長野江向山遺跡城跡全景（昭和22年米軍撮影空中写真）国土地理院所蔵　約1／4,000

PL 2

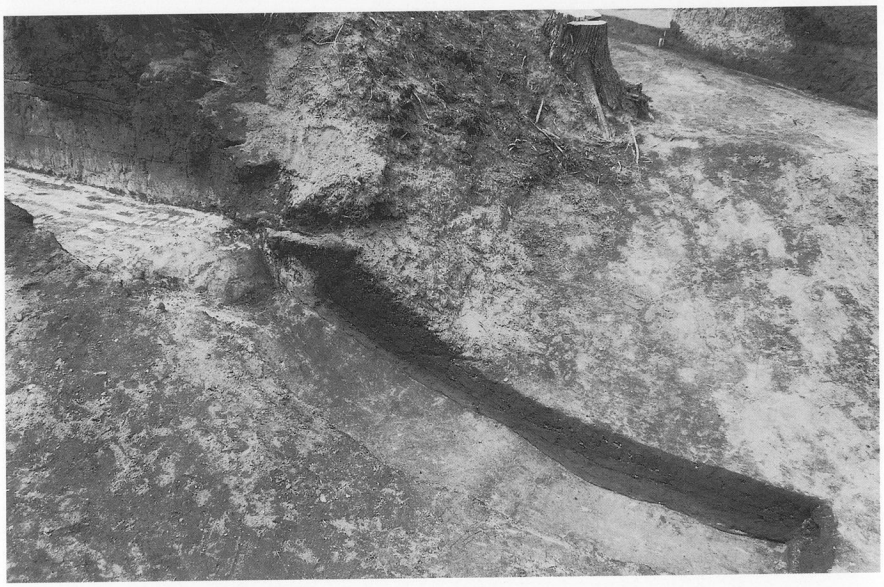
調査前現況（南西から）



第１号土墨確認状況
（西から）

第１号土墨確認状況
（北から）

第１トレンチ土層断面

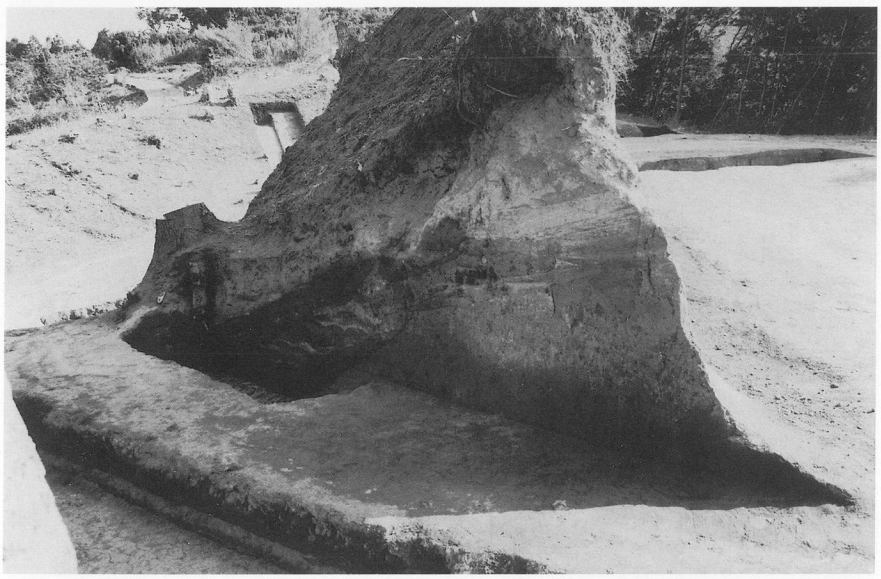


第１トレンチ土層断面

第２トレンチ土層断面
（東側）

PL 4

第２トレンチ土層断面
（東側）

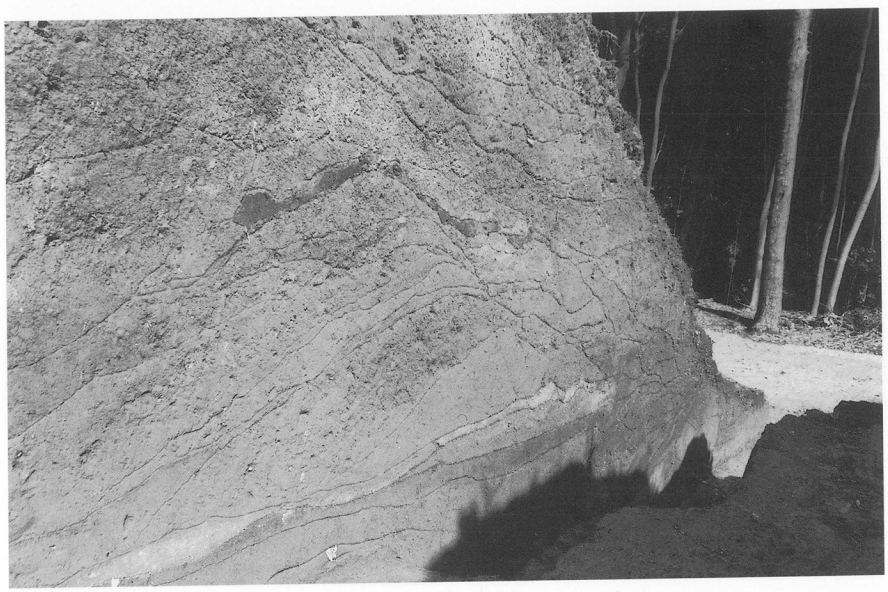


第２トレンチ土層断面
（西側）

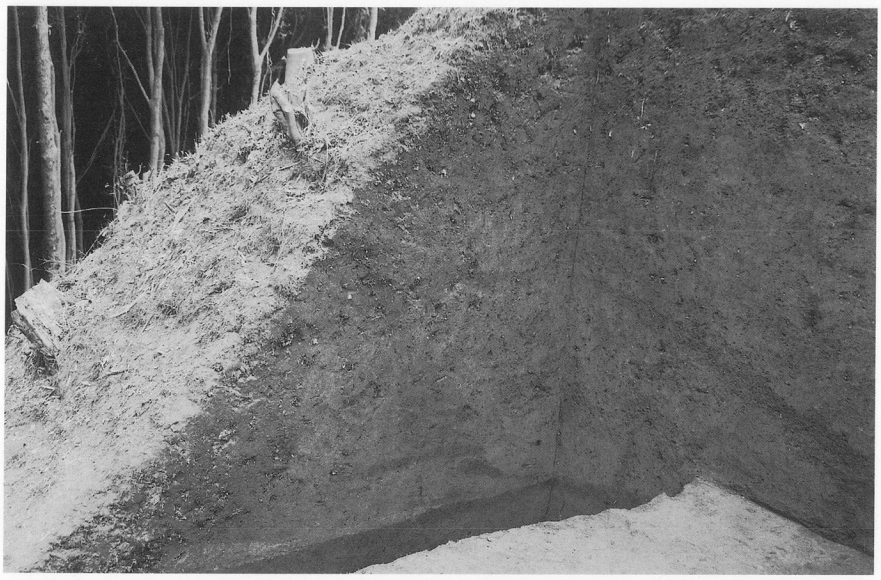
第３トレンチ土層断面

第３トレンチ土層断面
（第１号堀）

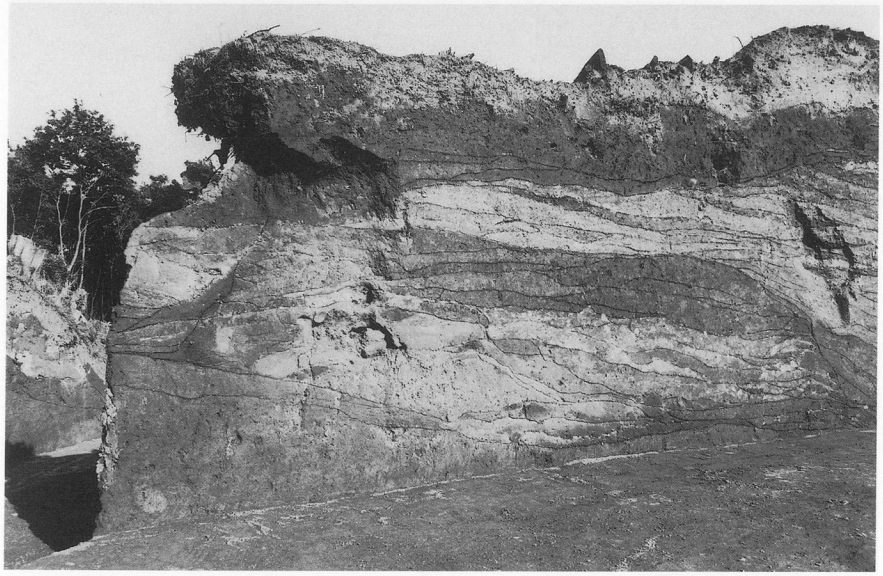
第４トレンチ土層断面



第４トレンチ土層断面



第５トレンチ土層断面



第６トレンチ土層断面

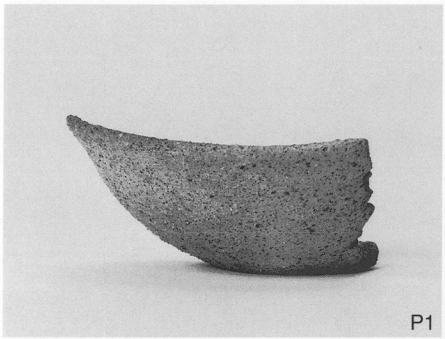
第７トレンチ土層断面

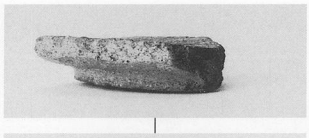
第８トレンチ土層断面

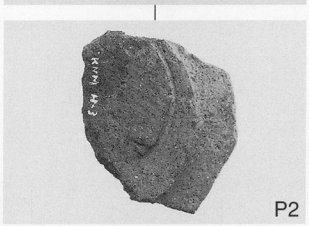
第９トレンチ土層断面
（東側）

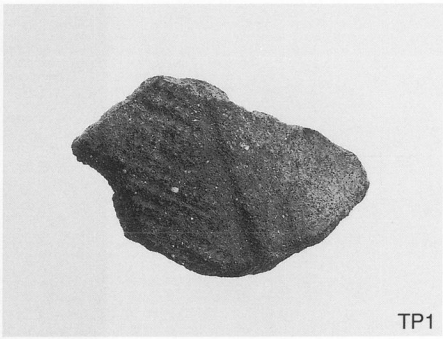
第１号土坑土層断面

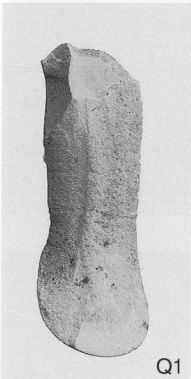
PL 8


P1

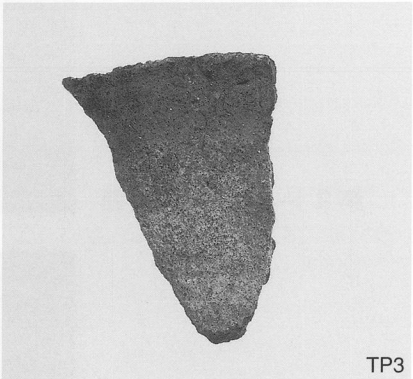


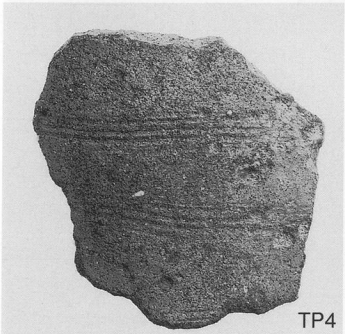

P2

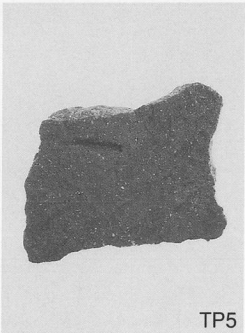

TP1

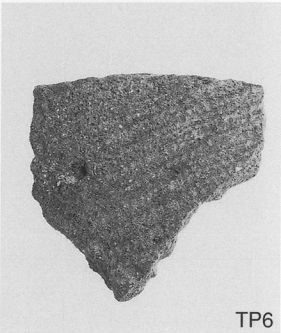

Q1

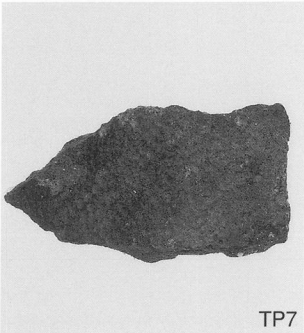
TP2

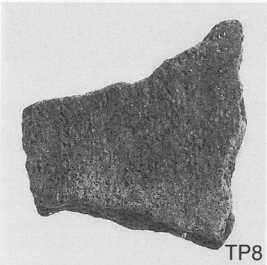

TP3

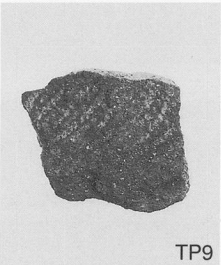

TP4

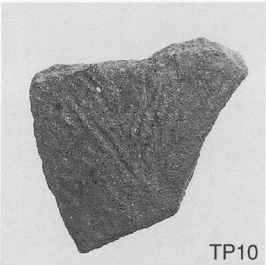

TP5

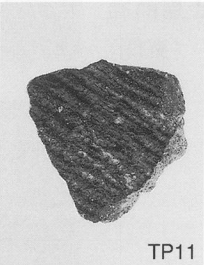

TP6

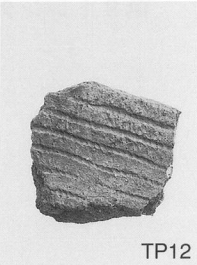

TP7


TP8


TP9


TP10


TP11


TP12

Q2

Q3

遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第172集

北浦複合団地造成事業地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅴ

長野江向山遺跡

平成13（2001）年３月15日　印刷
平成13（2001）年３月21日　発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
〒310－0911 水戸市見和１丁目356番地２号
茨城県水戸生涯学習センター分館内
ＴＥＬ 029－225－6587

印刷　山三印刷株式会社
〒311－4153 水戸市河和田町4433－33
ＴＥＬ 029－252－8481